多賀城市文化財調査報告書第18集

新　田　遺　跡

平成元年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

新　田　遺　跡

序

新田遺跡の所在する多賀城市の西部地区は、古墳時代から中・近世にかけての大規模な集落跡が存在するとともに、仙台市に隣接するという地理的要因から宅地造成等の開発が増加している地域でもあります。このため、近年はほぼ毎年といっていいほど、開発に伴う発掘調査が実施されており、本調査が新田遺跡の第10次調査にあたります。

本遺跡からは、これまでに古墳時代の土器が多量に出土したり、奈良・平安時代に国府多賀城と密接な係わりをもっていた人々が生活していたことを窺わせるような遺構や遺物が出土しています。さらに、中世では調査以前には想像もされなかった当時の有力者たちの大規模な館跡が発見され、県内のその後の中世遺跡の研究に、資料提供などの面で少なからぬ協力ができたと考えています。

本調査区からも、中世の館跡の一部を構成していたと思われる建物跡や井戸跡が発見され、館の範囲がさらに西側に広がることが確認できました。今後、これらの資料の蓄積によって中世の街並みの全容が明らかにされ、多くの場で活用されることを願ってやみません。

最後に、本調査にあたって多大な御協力をいただいた地権者をはじめとする関係機関の方々や、冬季間という悪条件の中で連日発掘調査に従事された作業員の皆さんに心から感謝申し上げます。

平成元年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　名　取　恒　郎

例　　言

1．本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが、昭和63年度の国庫補助事業として実施した「新田遺跡（第10次調査）発掘調査」の結果をまとめたものである。

2．本書の執筆・編集は、当センターの職員の協力を得て、調査担当者が行った。

3．本書の作成にあたっては、
佐藤悦子、菊池　豊、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子の協力を得た。

4．本書中における各遺構の略号は次の通りである。
SI－竪穴住居跡、SB－掘立柱建物跡、SD－溝跡、SE－井戸跡、SK－土壙

5．本書挿図中の水糸レベルは、標高値を示す。

6．調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。

7．本報告書の土色は、「新版標準土色帖」（小山・佐原　1976）を使用した。

8．調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存管理している。

調　査　要　項

1．遺跡所在地　　多賀城市山王字北寿福寺６番２

2．調 査 期 間　　昭和63年12月12日～平成元年２月17日

3．調 査 面 積　　620㎡（対象面積1,150㎡）

4．調査主体者　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男

5．調査担当者　　多賀城市埋蔵文化財調査センター
所　長(兼)　名取恒郎　　主任研究員　高倉敏明
技　師　石川俊英、千葉孝弥、石本　敬、相沢清利
嘱　託　鈴木久夫、滝川ちかこ

6．調査協力者　　村上高直（地権者）、浦山重幸

7．発掘調査参加者　　芦野しず子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、大友良子、小野玉乃、加藤文一、菊地タリヨ、熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤はつみ、桜井えい子、佐藤節子、菅原絹代、鈴木　劭、高野敏子、千葉享一、松本喜一、渡辺ゆき子

本　文　目　次

序

例言・調査要項

Ⅰ．新田遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 3

Ⅲ．調査方法と経過 …… 7

Ⅳ．調査成果 …… 8

1．発見遺構 …… 8

(1) 竪穴住居跡 …… 8

(2) 掘立柱建物跡 …… 11

(3) 溝　跡 …… 15

(4) 井戸跡 …… 19

(5) 土　壙 …… 29

2．出土遺物 …… 31

Ⅴ．考　　察 …… 38

挿図・図版目次

第１図　多賀城市内遺跡分布図 …… 2
第２図　調査区位置図 …… 4
第３図　新田遺跡各調査区溝跡検出状況 … 6
第４図　基本層位 …… 8
第５図　遺構配置図 …… 9・10
第６図　SI 01実測図 …… 11
第７図　SB01実測図 …… 12
第８図　SI 01・SB01出土遺物 …… 12
第９図　SB02実測図 …… 13
第10図　SB03実測図 …… 13
第11図　SB04・05実測図 …… 14
第12図　SB06実測図 …… 15
第13図　SD02セクション図 …… 15
第14図　SD02出土遺物 …… 16
第15図　SD04～06出土遺物 …… 17
第16図　SD05・07出土遺物 …… 18
第17図　SD01・04～08セクション図 …… 19
第18図　SE02出土遺物 …… 20
第19図　SE01～04実測図…… 21
第20図　SE06実測図 …… 22
第21図　SE05・07・08・10実測図 …… 23
第22図　SE06・08・09出土遺物 …… 24
第23図　SE09・12・14実測図 …… 24
第24図　SE11・13実測図 …… 25
第25図　SE16実測図 …… 26
第26図　SE15・17・18実測図 …… 27
第27図　SE13・14・16～18出土遺物 …… 28
第28図　SK01～04・06実測図 …… 29
第29図　SK03出土遺物 …… 30
第30図　出土遺物（古銭） …… 37
図版１　調査区全景 …… 45
図版２　調査区全景 …… 45
図版３　SI 01住居跡・SB06建物跡 …… 46
図版４　SI 01住居跡・SB06建物跡 …… 46
図版５　調査区北東部遺構検出状況 …… 46
図版６　SB01建物跡 …… 47
図版７　SB01建物跡 …… 47
図版８　SB02建物跡 …… 47
図版９　SB04・05建物跡検出状況 …… 48
図版10　SD01溝跡セクション …… 48
図版11　SD02溝跡セクション …… 48
図版12　SD05溝跡 …… 49
図版13　SD05溝跡 …… 49
図版14　SD05溝跡セクション …… 49
図版15　SD05溝跡土師器杯出土状況 … 50
図版16　SD06溝跡 …… 50
図版17　SD06溝跡 …… 50
図版18　SD07溝跡 …… 51
図版19　SD08溝跡 …… 51
図版20　各溝跡検出状況 …… 51
図版21　SE02井戸跡 …… 52
図版22　SE02井戸跡セクション …… 52
図版23　SE04井戸跡 …… 52
図版24　SE04井戸跡セクション …… 53
図版25　SE06井戸跡 …… 53
図版26　SE06井戸跡セクション …… 53
図版27　SE07井戸跡 …… 54
図版28　SE08井戸跡 …… 54
図版29　SE08井戸跡セクション …… 54
図版30　SE09井戸跡 …… 55

表 1　遺跡地名表 …… 3
表 2　新田遺跡調査年次・成果表 …… 5
図版31　SE09井戸跡セクション …… 55
図版32　SE11井戸跡 …… 55
図版33　SE11井戸跡セクション …… 56
図版34　SE12井戸跡 …… 56
図版35　SE12井戸跡セクション …… 56
図版36　SE13井戸跡 …… 57
図版37　SE13井戸跡セクション …… 57
図版38　SE13井戸跡漆器椀出土状況 … 57
図版39　SE14井戸跡 …… 58
図版40　SE14井戸跡セクション …… 58
図版41　SE15井戸跡 …… 58
図版42　SE15井戸跡セクション …… 59
図版43　SE16井戸跡 …… 59
図版44　SE16井戸跡セクション …… 59
図版45　出土遺物（1） …… 60
図版46　出土遺物（2） …… 61
図版47　出土遺物（3） …… 62
図版48　出土遺物（4） …… 63
図版49　出土遺物（5） …… 64

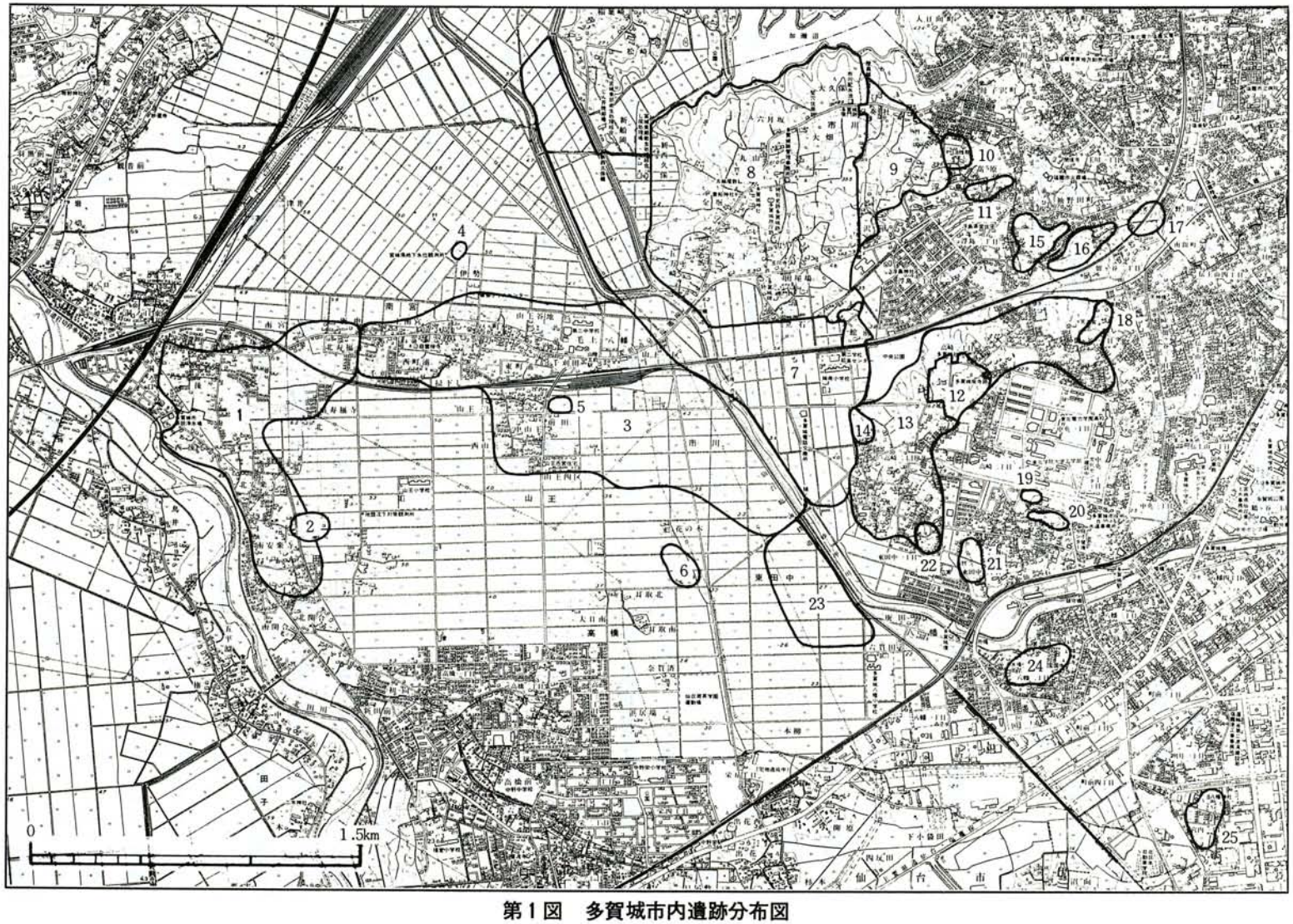
Ⅰ　新田遺跡の立地と環境

新田遺跡は多賀城市の西端部に位置し、その範囲は南北1.6km、東西0.8km、面積は約65haに及ぶ。遺跡の北側は、県道泉～塩釜線と東北本線が東西方向に横断し、西側は七北田川によって限られている。

本遺跡周辺は、七北田川によって形成された海抜6～8mの自然堤防が発達した地域で、広義の仙台平野の最北端に位置する。沖積層の厚さは40～60mに達し、特に最上部は3～10mの厚さで泥炭・有機質粘土及びシルト層と砂層との互層からなっている。

次に本遺跡を取り巻く歴史的環境をみてみると、周辺地域の多賀城市西部から仙台市東部にかけては数多くの遺跡が所在することが知られている。まず、本遺跡の東側に隣接する山王遺跡と七北田川対岸に位置する鴻ノ巣遺跡は、いずれも古墳時代から中世にかけての複合遺跡で、本遺跡と同様の性格を有している。奈良・平安時代に属する遺跡では、本調査区の北東約2kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡が所在し、これを取り巻くように関連する遺跡が濃密に分布する。特に南面地域には、前述した山王遺跡をはじめ市川橋遺跡、高崎遺跡などの広範囲にわたる遺跡が隣接して所在している。中世に属する遺跡では、本調査区の北西約2kmの高森山の頂上部に留守氏の居城である国指定史跡岩切城が所在する。また、本遺跡周辺の水田部には安楽寺遺跡、内館跡、山地田館跡が所在しているが後世の改変が著しく、現在は所在地等を限定することができなくなっている。

さて本遺跡において、これまでに実施された調査についてみると、最も早いものは本調査区の南西約400mの西後地区で昭和39年7月に行なわれている。これは土取り工事の際に多量の土器が出土したことから、県文化財保護課を通じて日本考古学協会員氏家和典氏に調査を依頼したものである。その結果、上下二層の遺物包含層を確認し、上層からは氏家氏編年の第五型式（栗囲式）土師器が検出されている。また下層からは古式の土師器が検出され、工事の際に出土したものもこの下層に包含されていたと考えられた（註1）。つづいて、昭和49年8月に県文化財保護課が本調査区の北側約150mの北寿福寺地区で試掘調査を行ない、中世の溝跡や平安時代の埋甕等を検出している。昭和56年度以降は、民間の開発行為の件数が著しく増加し、それに伴ない毎年のように発掘調査が実施されるようになり現在に至っている。これらの調査は、多賀城市教育委員会が一貫して担当するようになり、これまで9次にわたる発掘調査の結果多くの成果を挙げている。特に寿福寺地区からは大規模な溝跡に区画された中世の館跡が検出され、これまで全く知られていなかった多賀城周辺の中世を考えるうえで重要な遺跡であることが明らかになった。市教育委員会が実施した発掘調査の詳細については、以下に一覧表を掲載することにする。



第１図　多賀城市内遺跡分布図

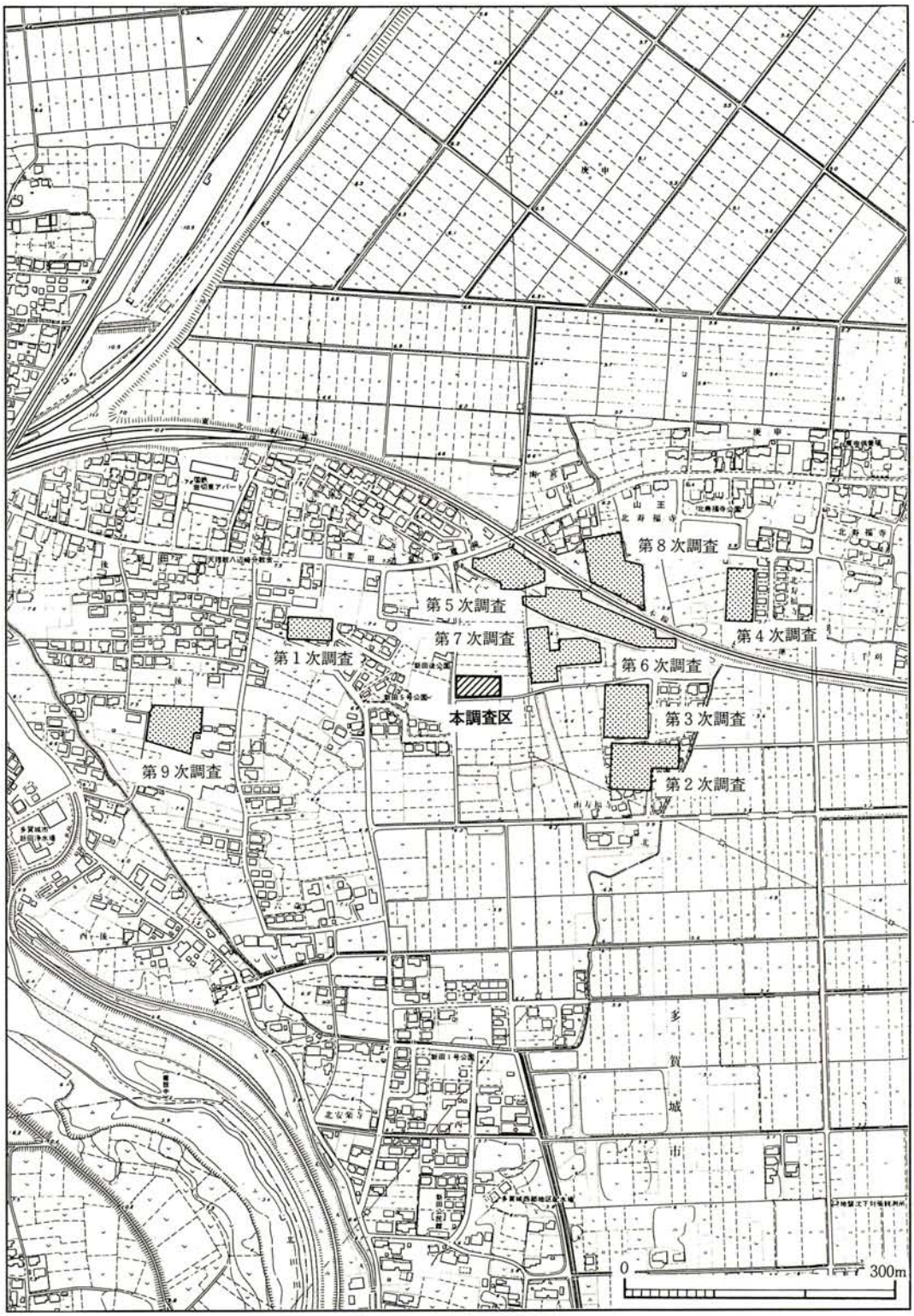
表1　遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	新田遺跡	多賀城市新田・山王	自然堤防	集落跡	古墳・奈良～中世
2	安楽寺遺跡	〃　新田	〃	寺院跡	古代・中世
3	山王遺跡	〃　山王・南宮	〃	集落跡	古墳・奈良～中世
4	内館跡	〃　南宮	〃	館跡	中世
5	山地田館跡	〃　山王	〃	〃	〃
6	大日北遺跡	〃　高橋字大日北	〃	散布地	奈良・平安
7	市川橋遺跡	〃　市川・浮島・高崎	沖積平野	集落跡・水田跡	〃
8	特別史跡多賀城跡	〃　市川・浮島	丘陵	国府跡	奈良～中世
9	西沢遺跡	〃　・	〃	散布地	奈良・平安
10	法性院遺跡	〃　浮島字高原	〃	〃	〃
11	高原遺跡	〃　〃	〃	〃	〃
12	特別史跡多賀城廃寺跡	〃　高崎1丁目・2丁目	〃	寺院跡	〃
13	高崎遺跡	〃　高崎・留ケ谷	〃	集落跡・館跡	奈良～近世
14	丸山囲古墳群	〃　高崎2丁目	丘陵麓	高塚古墳（円）	古墳
15	小沢原遺跡	〃　浮島2丁目	丘陵	散布地	奈良・平安
16	野田遺跡	〃　留ケ谷2丁目	〃	散布地・館跡	奈良～中世
17	矢作ケ館跡	〃　〃	〃	〃	〃
18	留ケ谷遺跡	〃　留ケ谷1丁目	〃	〃	奈良～近世
19	稲荷殿古墳	〃　高崎3丁目	〃	高塚古墳（円）	古墳（後）
20	桜井館跡	〃　中央1丁目	〃	館跡	中世
21	志引遺跡	〃　東田中2丁目	〃	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
22	東田中窪前遺跡	〃　東田中1丁目	丘陵麓	散布地・館跡	奈良～中世
23	六貫田遺跡	〃　八幡・東田中・高崎	自然堤防	散布地	奈良・平安
24	八幡館跡	〃　八幡2丁目	丘陵	散布地・館跡	奈良～中世
25	八幡沖遺跡	〃　宮内1丁目	平地	散布地	奈良・平安

Ⅱ　調査に至る経緯

多賀城市の西部地域にあたる山王、南宮、新田地区には、現在の町並みを中心に広範囲に遺跡が分布することが知られている。これらの遺跡は、国府多賀城に関連する奈良・平安時代の集落跡をはじめとする古墳時代から中・近世にかけての複合遺跡である。当地域は市街化区域とされており、また仙台市と隣接するという地理的条件から、近年宅地造成のための開発行為が急増している状況にある。これに伴ない昭和50年代の中頃以降、多賀城市教育委員会では埋蔵文化財包蔵地に係る開発計画については、民間業者と事前協議を行ない、その内容に応じて立会い調査、試掘調査、発掘調査などを実施して対応してきている。特に新田地区においては、昭和61年度から本年度にかけてだけで6箇所で発掘調査が行なわれている例が示すように、発掘調査件数がさらに増加する傾向にある。

本調査については、昭和62年11月に多賀城市山王字北寿福寺地内における幼稚園舎の建設計画が地権者より提示され、事前協議の申請があった。当該地周辺では、北側から東側にかけての近接地で昭和57・58・61・62年の4回にわたって発掘調査が実施されている（新田遺跡第2・

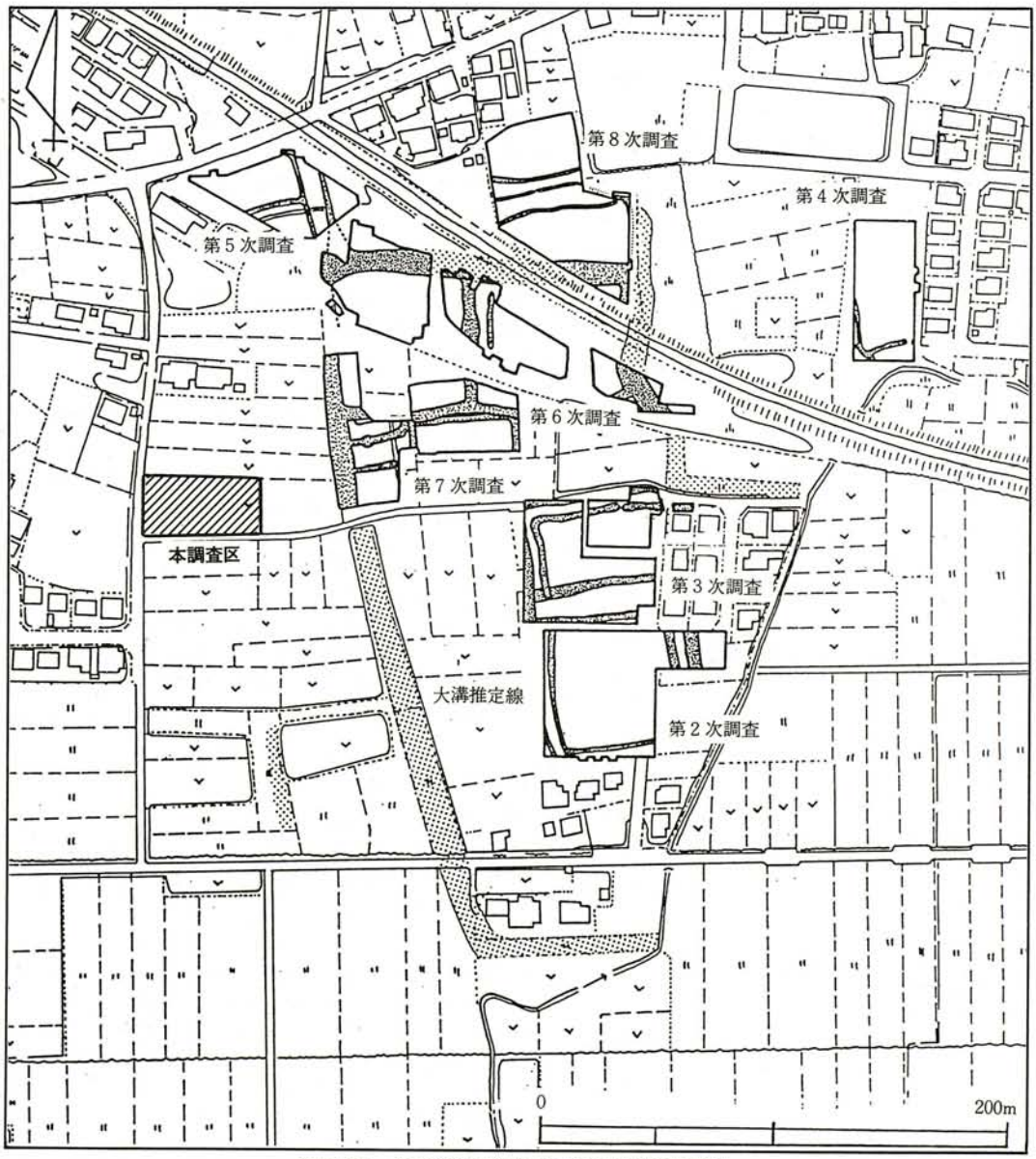

第8次調査
第5次調査
第7次調査
第1次調査
第4次調査
第6次調査
本調査区
第3次調査
第9次調査
第2次調査
多
賀
城
市
0
300m

第2図　調査区位置図

表2　新田遺跡調査年次・成果表

調査年次	調査地	面積	遺構年代	発見遺構	発見遺物
第1次調査 (昭和56年度)	新田字後	1,780㎡	奈良時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壙	土師器、須恵器、瓦、鉄鏃、刀子 銀環
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶器、古銭
第2次調査 (昭和57年度)	山王字南寿福寺	3,100㎡	古墳時代	特殊遺構 溝跡、土壙	土師器
			平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器、土鈴、瓦、石帯、円面硯
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器） 砥石、古銭
第3次調査 (昭和58年度)	山王字南寿福寺	3,700㎡	古墳時代	特殊遺構 溝跡、土壙	土師器
			平安時代	掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦 円面硯、石帯、管玉、刀子、鉄鏃
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器・櫛 塔婆）、古銭
第4次調査 (昭和59年度)	山王字北寿福寺	1,800㎡	平安時代	溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、 緑釉陶器、瓦
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器・ 板草履）、硯、砥石、石皿、鏡、釘
			近世	掘立柱建物跡 溝跡、土壙	陶磁器、古銭
第5次調査 (昭和61年度)	山王字北寿福寺	2,000㎡	平安時代	溝跡、土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、 緑釉陶器、瓦
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・塔婆・曲物容器・桶 木槌・鉢・板草履・杭・栓） 鉄製品（小柄・短刀）、古銭
第6次調査 (昭和62年度)	山王字北寿福寺	3,090㎡	古墳時代	溝跡	土師器
			平安時代	井戸跡、溝跡、土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器 木製品（斎串、鍬、建築物部材）
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器・塔 婆・物忌札・舟形・板草履・柄子） 鉄製品（小柄・短刀・鎌・轡）古銭、硯、茶 臼、炭化米、人骨
第7次調査 (昭和63年度)	山王字北寿福寺	2,640㎡	奈良時代	竪穴住居跡	土師器
			平安時代	井戸跡、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、 緑釉陶器、青磁、木製品（曲物容器）、石帯
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器・櫛 茶せん・柄杓・鍬）、鉄製品（小柄）、古銭、 和鏡、茶臼、温石、板碑
第8次調査 (昭和63年度)	山王字北寿福寺	3,150㎡	平安時代	溝跡、土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦
			中世	掘立柱建物跡 井戸跡、溝跡、土壙	陶磁器、木製品（漆器・下駄・曲物容器・柄 杓・板草履）、粉挽き臼、古銭
第9次調査 (昭和63年度)	新田字後	1,100㎡	古墳時代	竪穴住居跡 祭祀遺構、溝跡	土師器、手づくね土器、石製模造品（円盤形 剣形・臼玉・勾玉）、琥珀玉、紡錘車、砥石
			奈良時代	竪穴住居跡	土師器、須恵器
			平安時代	掘立柱建物跡、溝跡	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦
			中世	溝跡、土壙	陶磁器

3・5・6次調査)。これらの調査では、いずれも中世の大規模な環濠を伴う館（やかた）跡を中心に、古墳時代から近世にかけての幅広い時代にわたる遺構が検出されている。また、今年度は本調査に先だって、東側隣接地で第7次調査が実施されており、当地域が新田遺跡の範囲中でも、特に中世の遺構が濃密に分布することが明らかになった。これらの調査結果から、当該地においても同様の遺構が存在することが、ほぼ間違いないものと考えられた。そこで地権者に対して発掘調査実施の協力を依頼し、昭和63年12月に承諾書の提出を受けて調査を実施したものである。



第3図　新田遺跡各調査区溝跡検出状況

Ⅲ　調査方法と経過

当該地の調査では調査対象面積約1,150㎡のうち、幼稚園舎建設によって遺構面に影響がおよぼされると考えられる西半部に約600㎡の面積で調査区を設定した。測量基準点は国家座標を使用し、調査区北西隅に原点1（X：－189,117.000m、Y：＋11,595.000m）、南西隅に原点2（X：－189,135.000m、Y：＋11,595.000m）を設定した。この2点を結ぶ線を基準線とし、3m単位で原点1より東側で基準線に平行する南北線を順にE-01、E-02…、南側で直交する東西線を順にS-01、S-02……と表わした。平面図作成においては、これら2種類の線の各交点を基準点としている。また、これと同様に調査区全域に3m方眼のグリットを設定し、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表わし、その組み合わせによるグリット名をつけて遺物の取り上げを行なった。

発掘調査は、昭和63年12月12日より開始した。始めに重機によって耕作土である第Ⅰ層と第Ⅱ層の除去を行なった。第Ⅲ層は上層に比べしまりのある黒褐色シルトで、周辺地域の発掘調査において確認されている中世の遺物を含む堆積土と同じものであると判断した。この第Ⅲ層は調査区北壁付近では約20cmの厚さで確認できるが、南側に向かうにしたがって徐々に薄くなり、調査区の南側約⅓の範囲では確認することができなくなる。したがって、調査区の南壁寄りの部分では第Ⅱ層の下が直接地山である黄褐色砂質シルト（第Ⅳ層）となっている。北側では壁面観察の結果、遺構面が第Ⅲ層上面と第Ⅳ層上面の2枚存在することを確認した。調査は、まず第Ⅲ層上面の遺構確認に主眼をおき、精査の結果調査区東半部に多くの井戸跡や土壙が分布することを確認した（12月20日）。また、調査区南半部で東西方向に走るＳＤ01溝跡とＳＤ02溝跡を確認した。後者は遺構の大部分が調査区外に係ると考えられたため、規模を把握する目的で調査対象地域のぎりぎりまで調査区を拡張したが南側のラインは確認できなかった。これらの調査と並行して、実測図作成のための遣り方を設定する。遣り方水糸高は標高7.200mである。つづいて、井戸跡、土壙を中心に遺構の掘り込み調査を開始する（12月23日）。12月28日より年末、年始の休暇に入り、平成元年1月9日より調査を開始する。井戸跡等の掘り込み調査を終了後、柱穴跡が多く分布する調査区北東コーナー付近を拡張し、ＳＢ01建物跡を確認する。このほか、調査区の南東部と西端部でも柱穴のまとまりが観察でき、組み合わせを検討した結果ＳＢ02～05の3棟の建物跡を確認した。なお、以上の各遺構は掘り込み面や出土遺物等から中世に属する遺構であろうと判断した（1月17日）。次に調査区北半部の第Ⅲ層を除去したところ、中央付近を中心にＳＤ04～07溝跡を検出する。このうち、ＳＤ04溝跡の埋土中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が含まれることを確認した。また、調査区南東部で方形の柱穴掘方をもつＳＢ06建物跡を検出して、これらの掘り込み調査を開始する（1月26日）。

ＳＢ06建物跡の調査終了後、これと重複するＳＩ01住居跡の調査に入る。この２つの遺構は、ともに南側をＳＤ02溝跡によって切られているため全体の規模等は把握できなかった。この後、溝跡等の掘り込み調査と並行して、調査区北壁で土層の堆積状況を観察するとともに、溝跡の掘り込み面の再確認を行なう（２月６日)。各遺構の調査をほぼ終了し、調査区全体の写真撮影を行なう。その後、一部で建物跡等の補足調査を行ないながら、遺構の埋め戻し作業を開始する（２月10日)。遺構の保護のため手作業で粗砂による埋め戻しを行ない、２月17日をもってすべての調査を終了した。

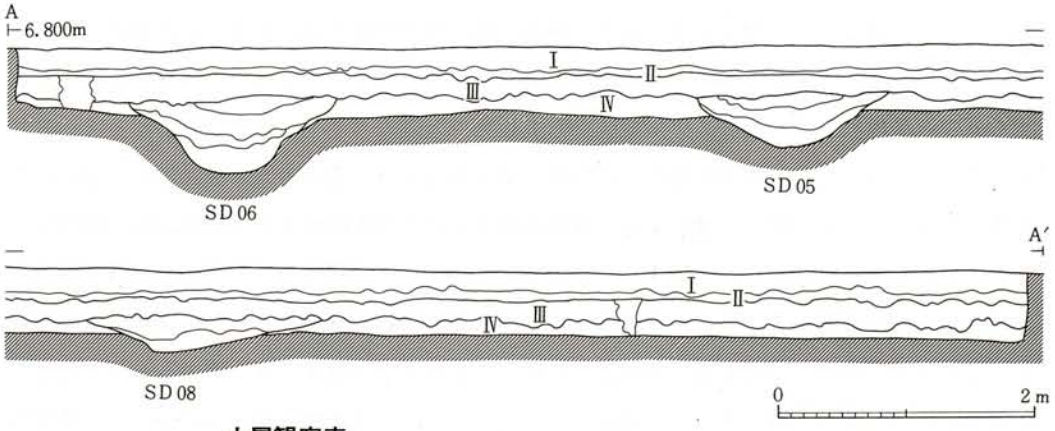
Ⅳ　調　査　成　果

１．発見遺構

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡６棟、溝跡11条、井戸跡18基、土壙７基、及び多数の小柱穴である。

(1)　竪穴住居跡

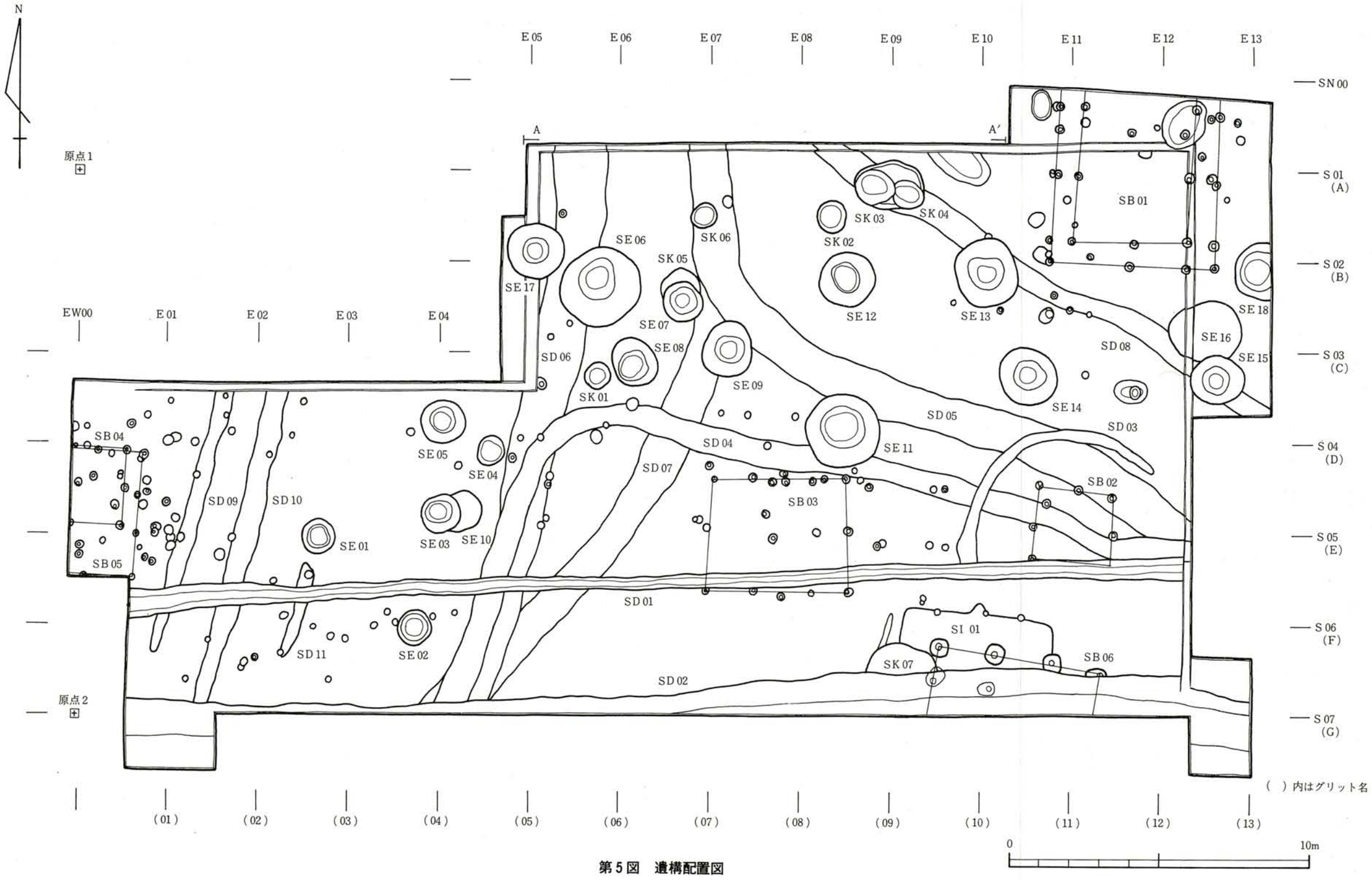
ＳＩ 01竪穴住居跡　調査区南東部の地山上で検出した住居跡である。ＳＢ06建物跡、ＳＤ02溝跡、ＳＫ07土壙と重複関係にあり、これらより古い。規模は北辺で５.０ｍを計るが、南半部がＳＤ02溝跡によって壊されているため、平面形については不明である。また全面的に削平が著しく、壁も８～15cmが残存しているにすぎない。方向は北辺でみると東で約６度南に偏して



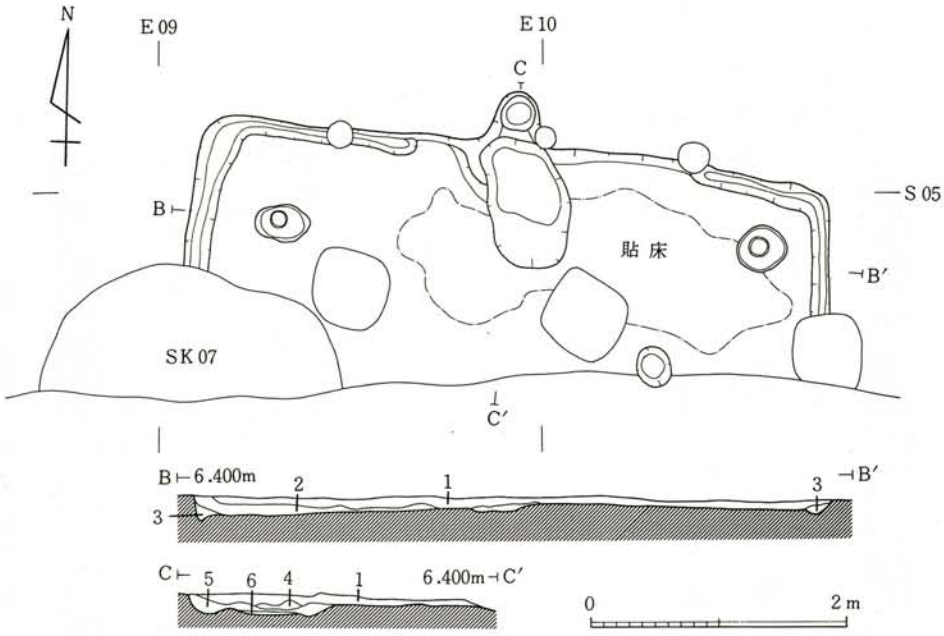
土層観察表

層位	土　　色	備　　考
Ⅰ	褐　色（10YR 4/4）	砂　質　粘性・しまりに欠ける。
Ⅱ	暗褐色（10YR 3/3）	〃　　黒褐色土を若干含む。
Ⅲ	黒褐色（10YR 2/3）	シルト　暗褐色土・炭化物を含む。
Ⅳ	黄褐色（10YR 5/3）	砂　質　酸化鉄を含む。粘性あり。

第４図　基本層位（調査区北壁）


N
原点1
原点2
E05
E06
E07
E08
E09
E10
E11
E12
E13
EW00
E01
E02
E03
E04
SN00
S01 (A)
S02 (B)
S03 (C)
S04 (D)
S05 (E)
S06 (F)
S07 (G)
A
A′
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SE01
SE02
SE03
SE04
SE05
SE06
SE07
SE08
SE09
SE10
SE11
SE12
SE13
SE14
SE15
SE16
SE17
SE18
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SI 01
( ) 内はグリット名
(01)
(02)
(03)
(04)
(05)
(06)
(07)
(08)
(09)
(10)
(11)
(12)
(13)
0
10m

第5図　遺構配置図



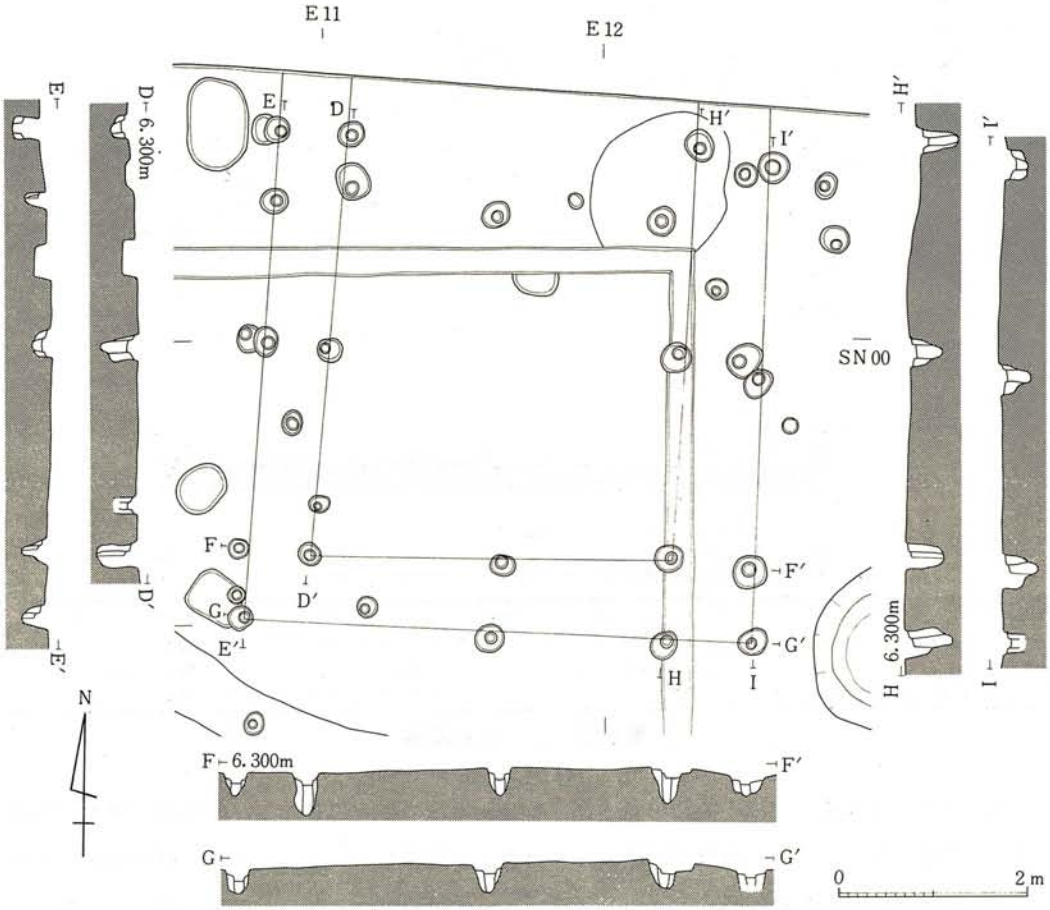
層位	土　　色	備　　考	層位	土　　色	備　　考
1	にぶい黄褐色(10YR⅓)	シルト　黒褐色土を斑状に含む	4	暗 赤 褐 色(5YR3/2)	シルト　焼土
2	〃　(　〃　)	〃　黒褐色土を1層より多く含む	5	にぶい黄褐色(10YR⅓)	〃　焼土粒を含む
3	灰 黄 褐 色(10YR½)	〃　周溝埋土	6	暗 赤 褐 色(5YR3/2)	〃　焼土

第6図　SI 01実測図

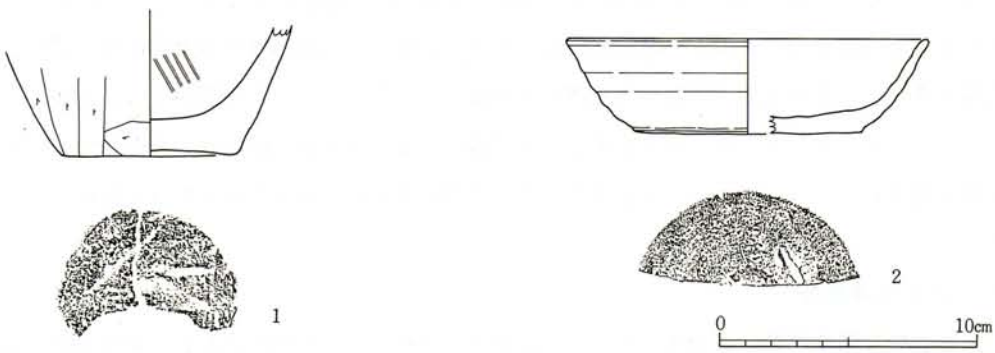
いる。カマドは北辺のほぼ中央に付設され、約40cmと短めの煙道をもつ。燃焼部と煙出し部は浅いくぼみになっており、燃焼部の床面上には焼土が堆積している。しかし、壁や床面にはさほど火熱を受けた痕跡は認められない。周溝はカマド付設部分を除いた各辺の壁沿いに巡っている。また、東半部では貼床が認められる。住居跡内で検出されたピットの内、北東と北西の各コーナー近くで検出されたものは、その位置や規模から主柱穴になるものとみられる。いずれも不整形の掘り方をもち、柱痕跡が認められる。遺物には土師器甕と須恵器杯があるが、出土量は多いといえず全体の形態を知り得るものは出土していない。土師器甕については、いずれもロクロ未使用のもので、埋土中出土の体部破片の多くは外面に刷毛目、内面にはヘラナデ調整が施されている。さらに、床面上からは、底部に木葉痕が観察できるもの（第8図1）が出土している。

(2)　掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡　調査区北東部の第Ⅲ層上面で検出した建物跡である。東西4間、南北4間以上の南北棟建物跡と考えられ、東西両辺と南辺で庇がつくことを確認した。しかし、北側が調査区外のため北辺を検出するまでには至らず、全体の規模等は不明である。方向は南側柱列でみると、東で約2度南に偏している。柱間は桁行が東側柱列で南より0.8m・2.05m・



第7図　SB01実測図



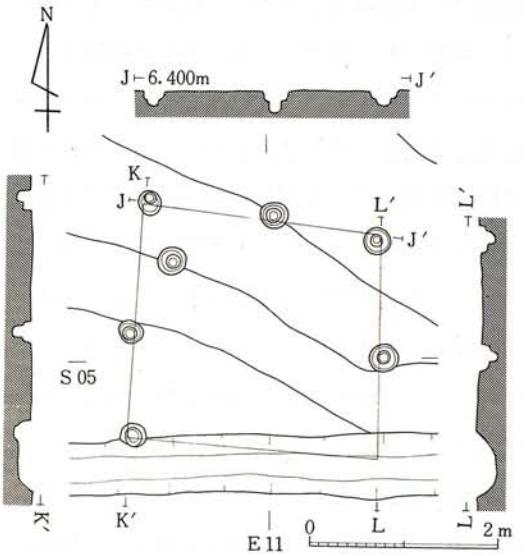
単位：cm　(　)は推定値

No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SI 01	土師器	甕	体部ヘラケズリ	刷毛目		7.0		底部に木葉痕
2	SB01	須恵器	杯	底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	(14.1)	(8.9)	3.7	掘方出土

第8図　SI 01・SB01出土遺物

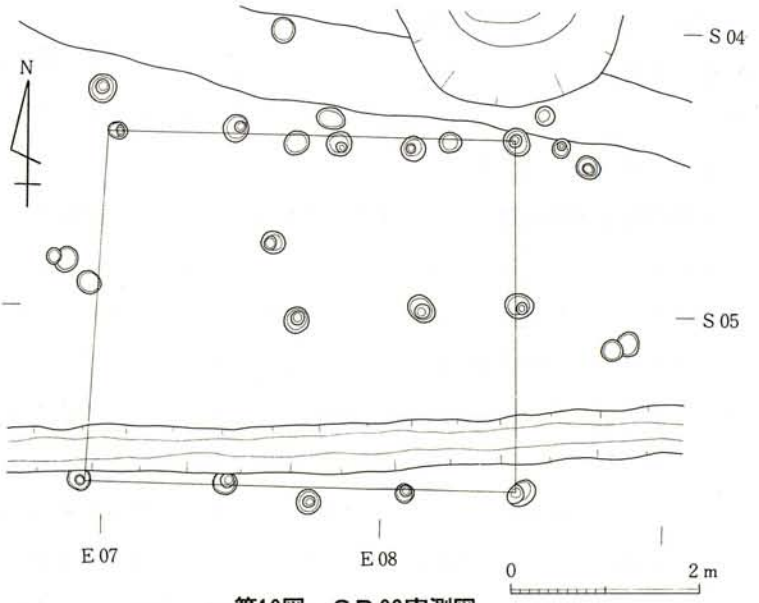
2.25m、西側柱列で0.75m・2.25m・2.15mを計り、ややばらつきがみられる。一方、梁行は身舎の南妻でみると、東より0.90m・1.95m・2.05m・0.75mで総長5.65mを計る。柱穴はほぼ円形を呈し、径25～35cmである。柱は柱痕跡より径15cm前後と推定される。遺物は土師器と中世陶器の小破片のほか、須恵器杯（第8図2）が東側柱列の南から3間目の柱穴の掘り方底面から出土している。

ＳＢ02掘立柱建物跡　調査区南東部の地山上で検出した東西2間、南北2間の建物跡である。ＳＤ01・04・05溝跡と重複関係にあり、ＳＤ01溝跡より古く、ＳＤ04・05溝跡より新しい。方向は西側柱列でみると、北で約5度東に偏している。柱間は北側柱列で西より1.37m・1.21mで総長2.43m、西側柱列では北より1.43m・1.06mで総長2.51mを計る。柱穴は円形を呈し、径30cm前後である。柱は柱痕跡より径約15cmと推定される。遺物は須恵器甕の小破片が出土している。



第9図　ＳＢ02実測図

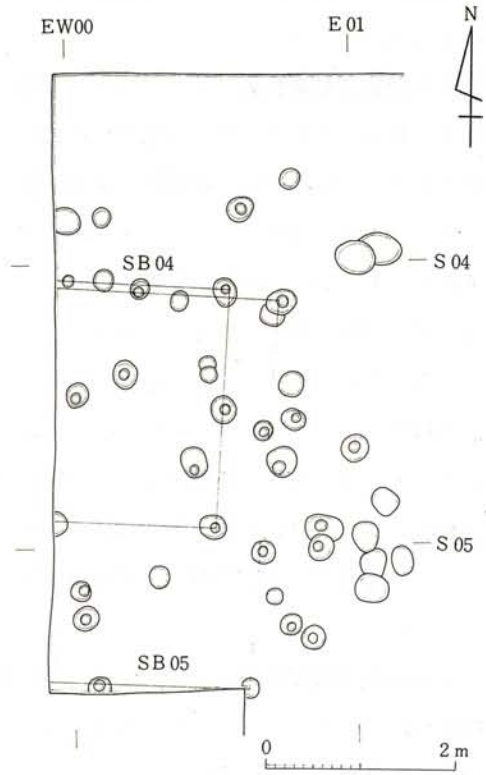
ＳＢ03掘立柱建物跡　調査区中央部やや南側の地山上で検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＤ01溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向についてみると、北辺と南辺の東西線は発掘基準線にほぼ一致しているが、南北線は東辺では北で2度西に偏し、西辺では3度東に偏している。柱間は桁行が北側柱列で西より1.26m・1.82m・1.12mで総長4.20m、南側柱列で西より1.57m・1.90m・1.17mで総長4.64mを計る。梁行は東妻で北より1.94m・1.76mで総長3.70mを計り、一方西



第10図　ＳＢ03実測図

妻は中央の柱穴の柱痕跡を確認していないため、柱穴中心に想定すると、北より2.10m・1.60mで総長3.70mである。柱穴はほぼ円形を呈し、径20～30cmを計る。柱は柱痕跡より径10～15cmと推定される。遺物は出土していない。

ＳＢ04掘立柱建物跡　調査区西側に設定した拡張区の第Ⅲ層上で検出した建物跡である。大半が調査区外に延びていると思われ規模等は不明であるが、一応ここでは南北２間、東西２間以上の建物跡と考えておきたい。またＳＢ05建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。方向は東側柱列でみると北で約３度東に偏している。柱間は東側柱列で北より1.25m・1.25mで総長2.50mを計る。柱穴は径30cm前後の円形を呈し、柱は柱痕跡より10cm前後と推定される。遺物は出土していない。

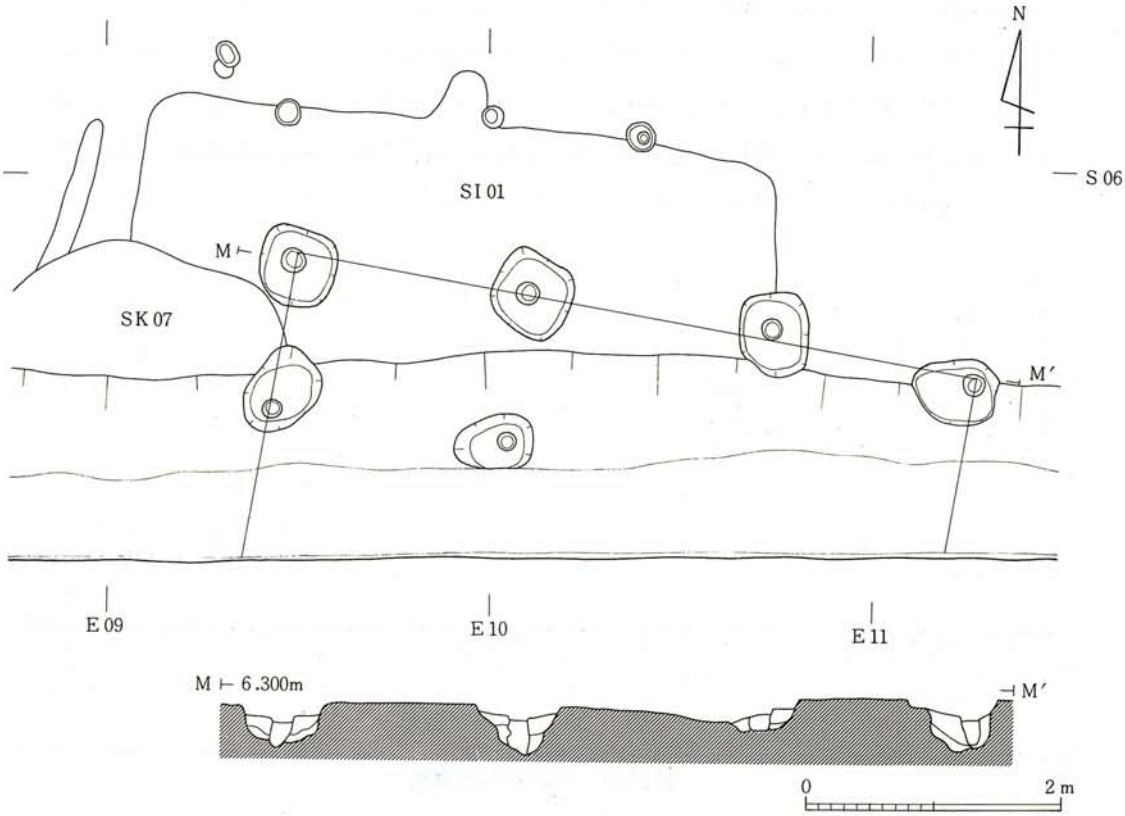


第11図　ＳＢ04･05実測図

ＳＢ05掘立柱建物跡　ＳＢ04建物跡と同様、調査区西側拡張区の第Ⅲ層上で検出した建物跡である。南北３間、東西２間を確認したが、大半が調査区外に延びていると思われ規模等は不明である。方向は東側柱列でみると北で約３度東に偏している。柱間は柱痕跡を確認していないものを柱穴の中心に想定すると、北より1.38m・1.25m・1.45mで総長4.08mを計る。柱穴は径25cm前後の円形を呈し、柱は柱痕跡より径約10cmと推定される。遺物は出土していない。

ＳＢ06掘立柱建物跡　調査区南東部の地山上で検出した建物跡である。重複関係よりＳＩ01住居跡より新しく、ＳＤ02溝跡より古い。ＳＤ02溝跡によって南半部を壊されており、北側柱列とこれより１間目の柱列の西側の２つの柱穴を確認したにすぎない。しかし、これらのことから東西３間の総柱の建物跡であろうと推定される。方向は北側柱列でみると東で約６度南に偏しており、ＳＩ01住居跡と同じ数値を示す。柱穴はほぼ方形を呈し、一辺の規模は約60cmを計る。確認面からの深さは25～40cmで、東側から１間目の柱穴を除いて底面の深さもほぼ一定している。また柱痕跡も認められ、柱の径は約15cmと推定される。柱間は北側柱列で西より1.85m・1.88m・1.65mで総長5.35mである。一方、北東隅柱と南に１間目の柱穴との間隔は1.15mで、東西の柱間に比べかなり狭くなっている。遺物は、ロクロ未使用の土師器甕が出土し

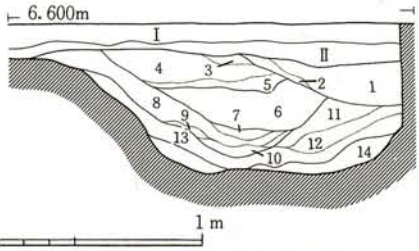
ている。



第12図　ＳＢ06実測図

(3) 溝　跡

ＳＤ01溝跡　調査区南側の地山上で検出した溝跡である。ＳＢ02・03建物跡、ＳＤ03～07・09～11溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。方向は東西に走っており、発掘基準線にほぼ一致する。規模は上幅0.4～0.9m、深さ約0.25m、長さは35mまで検出した。埋土は黒褐色土層ににぶい黄褐色を含むことが特徴である。遺物は土師器杯・甕、須恵器甕・蓋、中世陶器、カワラケが出土している。

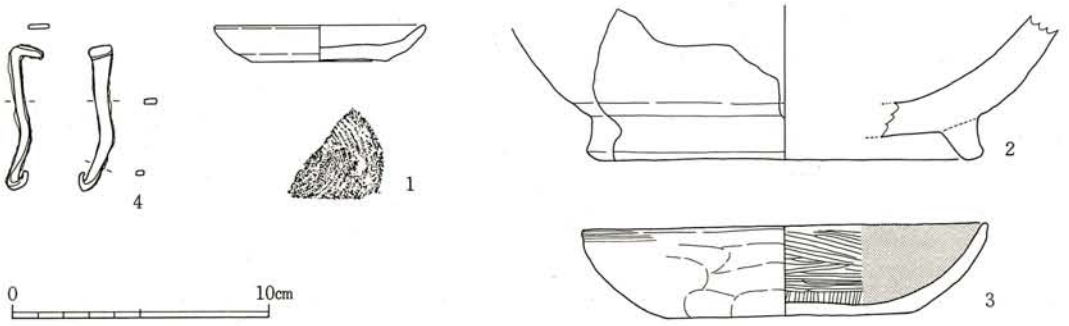


土層観察表

層位	土色	備考	層位	土色	備考
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト　炭化物、焼土粒を含む	8	黄灰色(2.5Y 4/1)	シルト　にぶい黄色砂質土を斑状に含む
2	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	〃　黒褐色土を混入	9	にぶい黄色(10YR 6/3)	砂質　黄灰色土を混入
3	〃　(〃)	〃　2層より色調がやや明るい	10	暗灰黄色(10YR 4/2)	粘土質
4	灰黄褐色(10YR 4/2)	〃　にぶい黄褐色土を斑状に含む	11	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト　やや砂質
5	黒褐色(10YR 3/1)	〃　炭化物、焼土粒を多く含む	12	灰色(5Y 4/1)	粘土質　にぶい黄色砂質土を互層に含む
6	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃　にぶい黄色砂質土を斑状に含む	13	〃(5Y 4/1)	〃　〃　層状に含む
7	にぶい黄色(10YR 6/3)	砂質　黄灰色土を混入	14	黄灰色(2.5Y 4/1)	砂質　黒褐色土をブロック状に含む

第13図　ＳＤ02セクション図

ＳＤ02溝跡　調査区南壁際の地山上で検出した溝跡である。重複する全ての遺構より新しい。方向は東西に走っており、発掘基準線にほぼ一致する。南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、上幅は約３ｍまで検出しており、深さも約90cmを計るなど、かなりの規模をもった溝跡であると推定される。また、埋土から６時期以上の重複があることが認められる。遺物は、土師器杯（第14図３）･甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器、中世の無釉陶器擂鉢（第14図２）、カワラケ（第14図１）、鉄釘（第14図４）が出土している。



単位：cm　（ ）は推定値

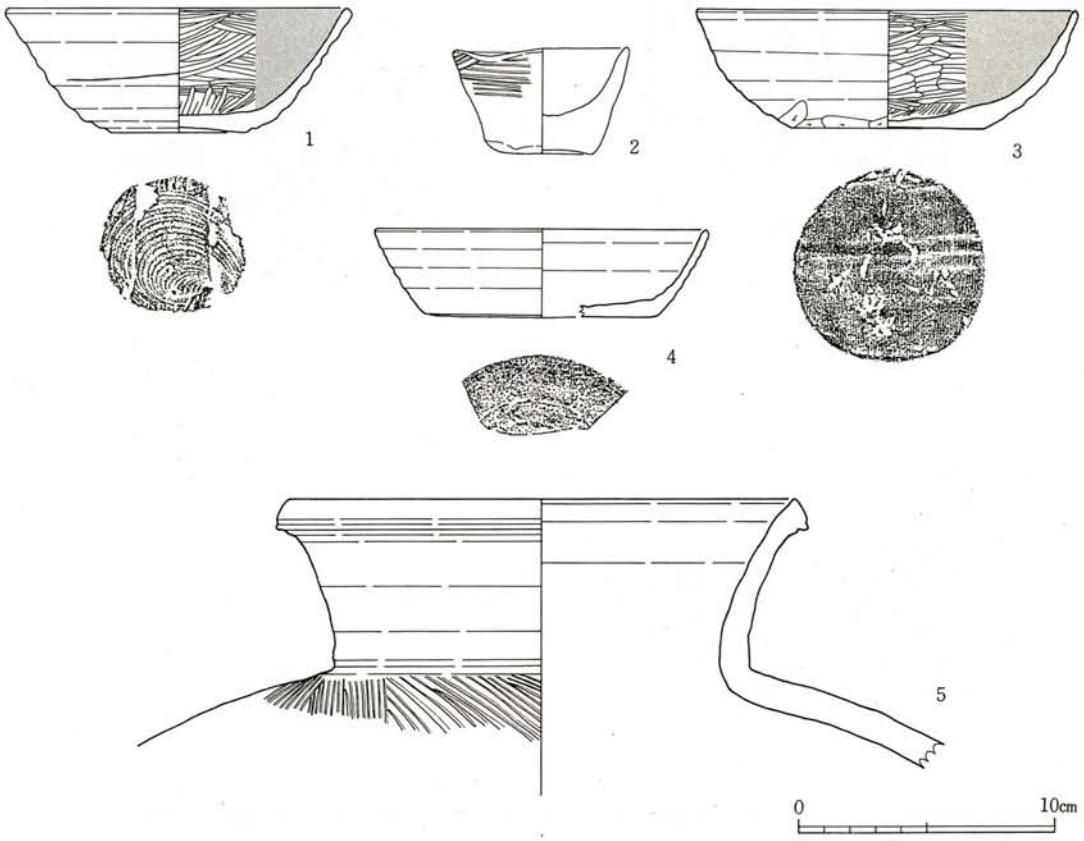
No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD02	カワラケ		ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ→ナデ	(8.3)	(5.3)	1.4	
2	〃	無釉陶器	擂鉢	ヨコナデ	摩耗		(15.4)		内外面にスス状の付着物
3	〃	土師器	杯	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ	ヘラミガキ･黒色処理	(15.8)	(9.3)	3.5	割口にタール状の付着物
4	〃	鉄製品	釘	全長 5.7cm　幅 1.0cm　厚さ 0.2cm					

第14図　ＳＤ02出土遺物

ＳＤ03溝跡　調査区南東部の地山上で検出した溝跡である。重複関係よりＳＤ01溝跡より古く、ＳＤ04・05溝跡より新しい。ＳＢ02建物跡を囲むように半円状に延びるものであるが、両者の関連はつかめなかった。規模は上幅30～60cm、深さ約８cmを計る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ04溝跡　調査区南東部の地山上で検出した溝跡である。重複関係よりＳＢ02･03建物跡、ＳＤ01～03溝跡、ＳＥ11井戸跡より古く、ＳＤ05～07溝跡より新しい。方向は調査区中央部で東側にゆるやかに屈曲するものである。規模は上幅０.７～１.０ｍ、深さ0.25～０.４ｍを計る。底面は丸底気味で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は基本的に灰黄褐色土と黒褐色の２層からなっており、上層に灰白色火山灰を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は、土師器杯（第15図１）･甕、須恵器杯・蓋・甕、赤焼き土器杯が出土している。

ＳＤ05溝跡　調査区中央部の北側から南東部にかけての地山上で検出した溝跡である。重複関係よりＳＤ01～04溝跡、ＳＥ07・09・11井戸跡、ＳＫ05・06土壙より古く、ＳＤ07溝跡より新しい。方向は北側より南北方向に延び、その後湾曲して東西方向に斜行する。規模は上幅1.２～1.5ｍ、深さは約50cmを計る。埋土は基本的にやや砂質気味のにぶい黄褐色土と褐灰色土



単位：cm　（　）は推定値

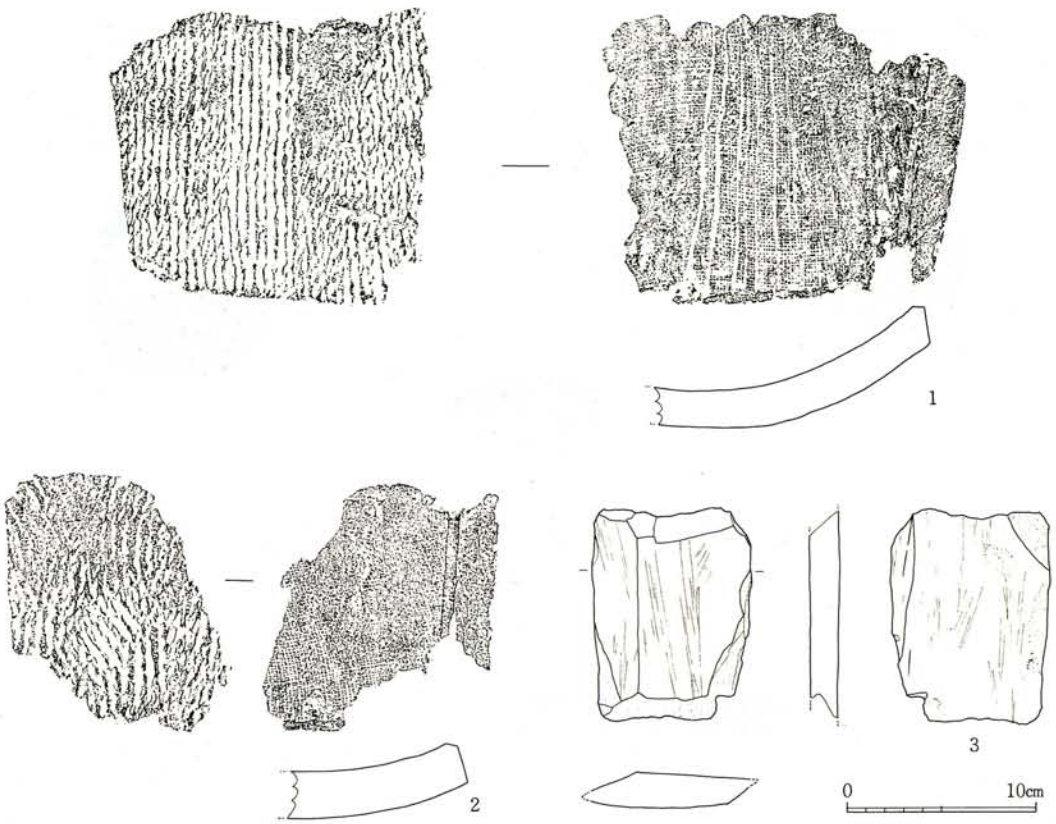
No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	ＳＤ04	土師器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(13.5)	5.4	4.8	
2	ＳＤ05	手づくね土器		刷毛目、ナデ	摩滅のため不明	6.9	4.2	4.1	
3	〃	土師器	杯	体部下端～底部手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	14.9	7.5	4.6	完形
4	ＳＤ06	須恵器	〃	底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	(13.0)	(9.0)	3.4	
5	ＳＤ05	〃	甕	ロクロナデ、平行叩き	ロクロナデ、ナデ	(20.7)			

第15図　ＳＤ04～06出土遺物

の２層からなる。遺物は土師器杯（第15図３）・甕、須恵器杯・甕（第15図５）、手づくね土器（第15図２）、平瓦（第16図１・２）が出土している。

ＳＤ06溝跡　調査区中央部の地山上で検出した南北方向に延びる溝跡である。重複関係よりＳＤ01・02・04溝跡、ＳＥ06・17井戸跡より古く、ＳＤ07溝跡より新しい。方向は発掘基準線に対して北で約17度東に偏している。規模は上幅１.５～１.８ｍ、深さは約40cmを計る。壁は下方から緩やかな立ち上がりを示すが、底面付近では段を有する箇所も認められる。埋土は灰黄褐色土と褐灰色土の２層に分けられ、底面付近でやや砂質が強くなる傾向にある。遺物は土師器杯、須恵器杯（第15図４）が出土している。

ＳＤ07溝跡　調査区中央部の地山上で検出した南北方向に斜行する溝跡である。ＳＤ01・02



No.	遺構	種類	凸面	凹面	備考
1	ＳＤ05	平瓦	縄叩き目	布目、部分的にナデ、糸切り痕	
2	〃	〃	〃	布目、部分的にナデ	
3	ＳＤ07	砥石			

第16図　ＳＤ05・07出土遺物

04～06溝跡、ＳＥ06・09井戸跡と重複関係にあり、これらより古い。規模は上幅1.1m～1.5m、深さは約0.4mを計る。断面は舟底形を呈し、壁は底面より緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分けられるが、色調が若干異なる程度で土質の明瞭な違いはみられない。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺、砥石（第16図3）が出土している。

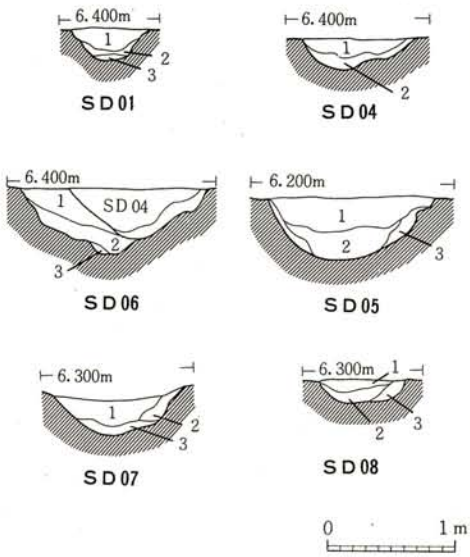
ＳＤ08溝跡　調査区中央部の地山上で検出した溝跡である。ＳＥ13・15・16井戸跡、ＳＫ03・04土壙と重複関係にあり、これらより古い。方向は発掘基準線に対して東で約30度南に偏している。規模は上幅60～90cm、深さは約20cmを計る。埋土は黒褐色土、にぶい黄褐色砂質土、やや粘性のある灰黄褐色土からなっている。遺物は出土していない。

ＳＤ09溝跡　調査区南西部の地山上で検出した溝跡である。ＳＤ01溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向は発掘基準線に対して北で約15度東に偏しており、後述するＳＤ10・11溝跡と同様の方位をとっている。規模は上幅40～60cm、深さ約10cmを計るが、残存状態が悪く南

壁付近では確認できなくなる。埋土は暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ10溝跡　調査区南西部の地山上で検出した溝跡である。ＳＤ01・02溝跡と重複関係にあり、これらより古い。規模は上幅50～80cm、深さ約10cmを計る。埋土は暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ11溝跡　ＳＤ09・10溝跡と同様、調査区南西部の地山上で検出した溝跡である。ＳＤ01溝跡と重複関係にあり、これより古い。残存状態が著しく悪く、長さは3.3ｍにわたって検出しただけである。埋土はＳＤ09・10溝跡と同じく、暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。



土層観察表

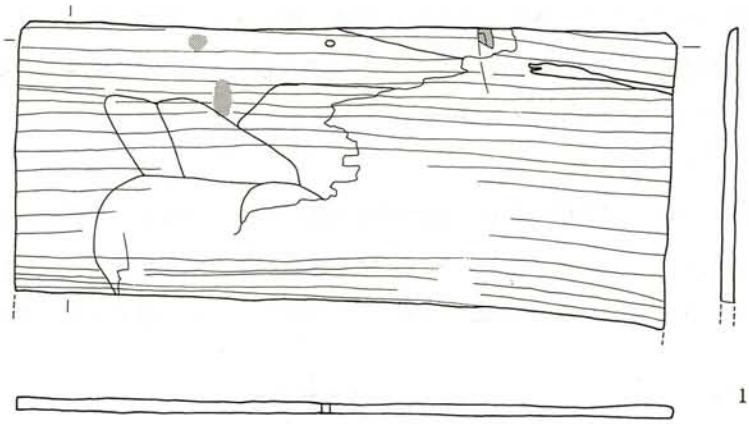
層位	土色	備考	
ＳＤ01			
1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	にぶい黄褐色土を斑状に含む
2	〃 (10YR 3/2)	〃	１層含有土と褐灰色土を混入
3	〃 (〃)	〃	にぶい黄褐色土を斑状に含む
ＳＤ04			
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	灰白色火山灰を斑状に多く含む
2	黒褐色(10YR 3/1)	〃	にぶい黄褐色土を粒状に含む
ＳＤ05			
1	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	やや砂質。酸化鉄を含む
2	褐灰色(10YR 5/1)	〃	にぶい黄褐色砂質土を含む
3	黒褐色(10YR 3/1)	〃	２層含有土と褐灰色土を混入
ＳＤ06			
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	酸化鉄を含む
2	褐灰色(10YR 4/1)	〃	にぶい黄色土を斑状に含む
3	〃 (〃)	砂質	にぶい黄色砂質土を混入
ＳＤ07			
1	にぶい黄橙色(10YR 4/3)	シルト	やや砂質
2	灰黄褐色(10YR 4/2)	〃	にぶい黄色砂質土を斑状に含む
3	褐灰色(10YR 5/1)	〃	〃
ＳＤ08			
1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	にぶい黄橙色砂質土を斑状に含む
2	にぶい黄橙色(10YR 6/4)	砂質	黒褐色土を斑状に含む
3	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	２層に比べ粘性がやや強い

第17図　ＳＤ01・04～08セクション図

(4)　井戸跡

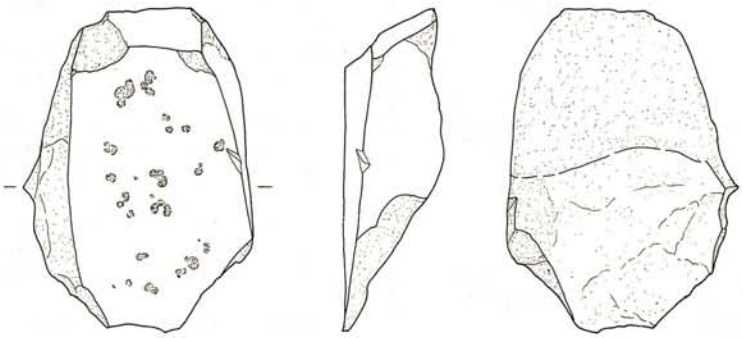
ＳＥ01井戸跡　調査区南西部の地山上で検出した井戸跡である。平面形は円形を呈し、壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がり、上方でやや外傾している。規模は直径1.13m、深さは1.2mを計る。埋土は最下層に黒褐色を呈した粘土質土が厚く堆積し、その上層にはにぶい黄橙色土を斑状及びブロック状に含んだ土層がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＥ02井戸跡　調査区南西部のＳＤ01溝跡の南側の地山上で検出した井戸跡である。平面形は円形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中頃で崩落のためか外側に大きくふくらんでいる。規模は直径1.06m、深さは1.4mを計る。埋土は最下層に粘性に富む砂質土が堆積し、その上層にはにぶい黄橙色土を含んだ黒褐色土などが堆積し、南側からそれらが流れ込んだ様相を示している。遺物は、板状木製品（第18図１）と砥石（第18図２）が出土している。

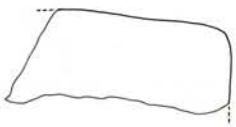


1

トーン部分は焦痕



2



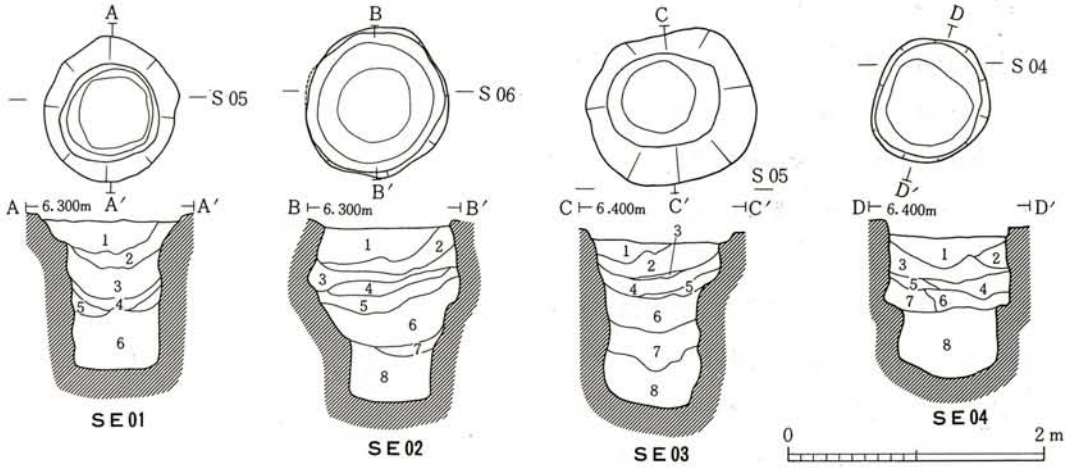
No.	種　類	備　考
1	板状木製品	片面にケズリ痕、若干の焦痕あり　角を整形　釘穴１ケ所　長さ25.7cm、残存幅10.5cm、厚さ0.5cm
2	砥　石	片面剝離

第18図　ＳＥ02出土遺物

ＳＥ03井戸跡　調査区南西部のＳＤ04溝跡の西側の地山上で検出した井戸跡である。ＳＥ10井戸跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は円形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃からわずかに外傾しながら上端に至る。規模は直径1.15m、深さは1.4m を 計る。埋土は全体的にレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＥ04井戸跡　調査区南西部の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＥ03井戸跡の北東側に近接して位置する。平面形は円形を呈し、壁は底面から上端にかけてほぼ垂直に立ち上がるが、中頃で明瞭な段を有する。規模は直径0.96m、深さは1.2m を計る。埋土は最下層に黒色

粘土質土が厚く堆積し、その上層には灰黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積している。また、これらの土層中に暗灰褐色土などが斑状及びブロック状に多く含まれることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器甕、中世陶器擂鉢が出土している。



土層観察表

層位	土色	備考				
SE 01						
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物を含む			
2	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	にぶい黄橙色土を斑状に含む			
3	褐灰色(10YR5/1)	〃	にぶい黄橙色土を斑状、ブロック状に含む			
4	黒褐色(10YR3/1)	粘土質				
5	褐灰色(10YR5/1)	砂質	にぶい黄橙色土を斑状に含む			
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質				
SE 02						
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	同色の砂質土を混入			
2	黒褐色(10YR3/1)	〃	にぶい黄橙色土を斑状に含む			
3	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質	黒褐色土を混入			
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む			
5	〃 (10YR3/1)	〃	粘性ややあり			
6	〃 (2.5Y 3/1)	粘土質	暗オリーブ灰色砂質土を含む			
7	黒色(2.5Y 3/1)	〃				
8	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)	砂質	粘性あり			

層位	土色	備考				
SE 03						
1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	にぶい黄色土を斑状に多く含む			
2	〃 (〃)	〃	同色砂質土、黒褐色土を混入			
3	黒色(10YR3/1)	粘土質	木炭層			
4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	暗灰黄色砂質土を混入			
5	褐灰色(10YR5/1)	〃	にぶい黄色土を斑状に含む			
6	黒褐色(10YR3/1)	〃	にぶい黄色砂質土を混入			
7	黒色(10YR3/1)	粘土質				
8	にぶい黄橙色(2.5Y 6/3)	砂質	黒色粘土質を混入			
SE 04						
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	暗灰黄色土を斑状に多く含む			
2	黒褐色(10YR3/1)	〃	浅黄色土と暗灰黄色土を含む			
3	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	黒褐色土を斑状に多く含む			
4	黒褐色(10YR3/1)	〃	暗灰黄色土を斑状に含む			
5	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	砂質	黒褐色土を斑状に含む			
6	黒褐色(2.5Y 3/1)	シルト	粘性ややあり			
7	〃 (〃)	〃	暗灰黄色砂質土を混入			
8	黒色(2.5Y 3/1)	粘土質	暗オリーブ灰色砂質土を含む			

第19図　ＳＥ01～04実測図

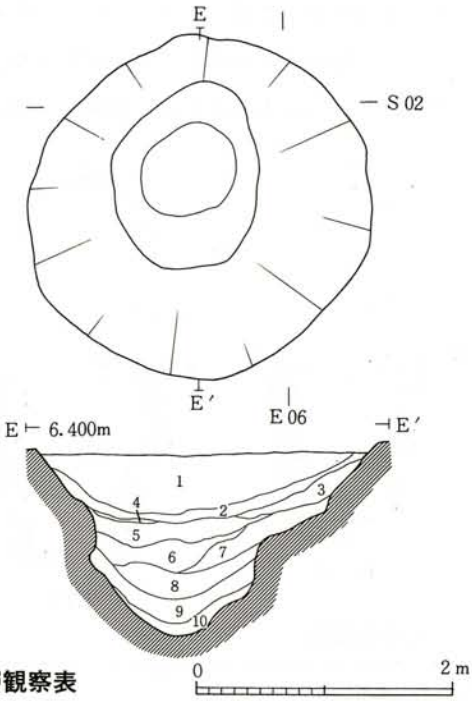
ＳＥ05井戸跡　調査区西側の北壁近くの第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＥ04井戸跡の北西側に近接して位置する。平面形は円形を呈し、壁は底面からやや外傾しながら立ち上がり、中頃でゆるやかな段を有する。規模は直径1.40m、深さは1.3mを計る。埋土は、黒褐色土と灰黄褐色土がレンズ状に交互に堆積している。遺物は土師器、須恵器、中世陶器、カワラケが出土している。

ＳＥ06井戸跡　調査区中央部北側の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＤ06溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は円形を呈し、壁は丸味をおびた底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃から上方で大きく外傾する。規模は直径2.68m、深さは1.5mを計る。埋土は

黒褐色土、黒色土が主体となっており、レンズ状に堆積している。遺物は土師器杯・甕(第22図１)、須恵器杯・壺、中世陶器甕・擂鉢が出土している。

ＳＥ07井戸跡　ＳＥ06井戸跡の東側に近接した第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＤ07溝跡、ＳＫ05土壙と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は円面を呈し、壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がる。しかし中頃で大きな段を有し、その上方では直径が一まわり大きくなる。規模は直径1.20m、深さは1.3mを計る。埋土は最下層に砂質土を混入した黒色粘土質土が堆積し、その上層には黒褐色土を主体とする土層が堆積している。遺物は土師器、須恵器、中世陶器が出土している。

ＳＥ08井戸跡　調査区中央付近の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＥ06井戸跡の南側に近接して位置する。平面形はやや形のくずれた円形を呈する。壁がほぼ垂直に立ち上がり、中頃で大きな段を有するものと思われるが、崩落のため一様でない。規模は直径1.58m、深さは1.4mを計る。埋土は下層に粘土質土が厚く堆積し、その上層には木炭層や炭化物を多く含んだ土層が堆積している。遺物は土師器、須恵器甕・壺、中世陶器、カワラケ（第22図２）が出土している。



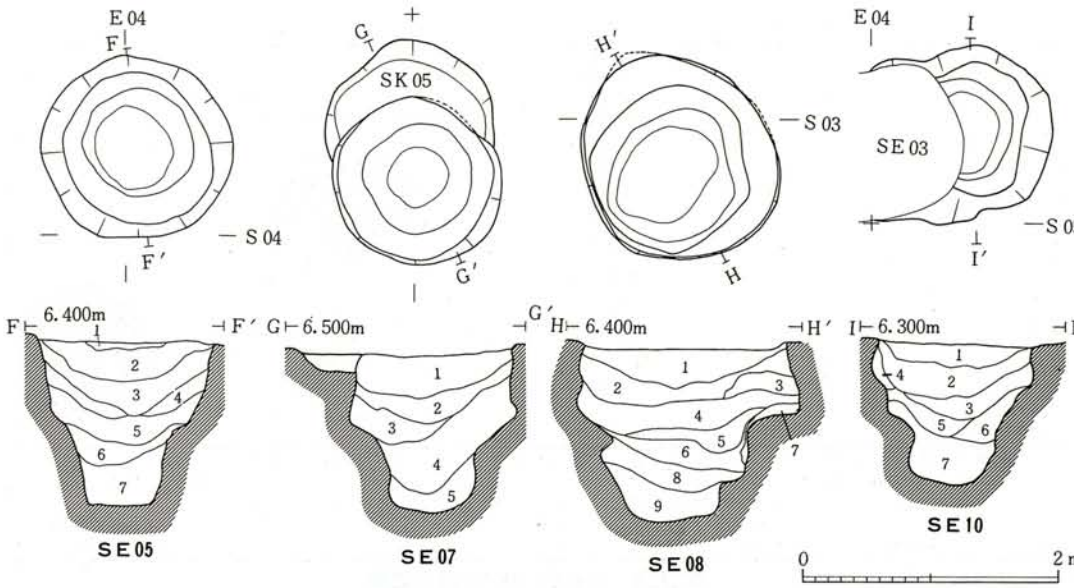
土層観察表

層位	土色	備考	
1	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	にぶい黄褐色土と炭化物を含む
2	褐灰色(10YR 4/1)	〃	灰黄褐色砂質土と炭化物を含む
3	黒褐色(10YR 3/1)	〃	灰黄褐色砂質土を若干含む
4	黒色(10YR1.7/1)	〃	粘性ややあり　木炭層
5	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	暗オリーブ灰色土を含む
6	黒色(10Y 3/1)	〃	灰オリーブ砂質土を層状に含む
7	灰色(10Y 4/1)	〃	暗オリーブ灰色土を混入
8	黒色(2.5GY3/1)	粘土質	暗緑灰粘土質土を若干含む
9	暗緑灰色(7.5GY3/1)	〃	やや砂質
10	黒色(2.5GY3/1)	〃	〃

第20図　ＳＥ06実測図

ＳＥ09井戸跡　調査区中央付近の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＤ05・07溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は楕円形を呈し、壁は丸味をおびた底面から緩やかに外傾しながら立ち上がるが、中頃から上方は傾斜がやや大きくなる。規模は長径1.85m、短径1.70mで深さは1.6mを計る。埋土は最下層に粘性に富む砂質土が堆積し、その上層には地山粒や炭化物を含んだ黒褐色土が堆積している。遺物は土師器、赤焼き土器杯、カワラケ（第22図３）、円盤状製品（第22図４）が出土している。

ＳＥ10井戸跡　調査区南西部の地山上で検出した井戸跡である。SE03井戸跡と重複関係にあり、これより古い。平面形はＳＥ03井戸跡によって西側が切られているため明確ではないが、



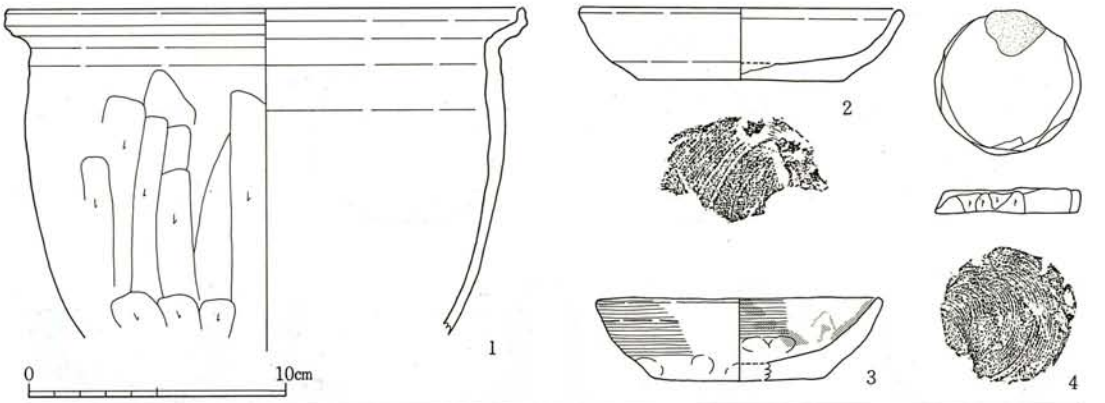
土層観察表

層位	土色		備考
SE 05			
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	にぶい黄橙色土を斑状に含む
2	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	〃
3	黒褐色(10YR3/1)	〃	にぶい黄橙色土と炭化物を含む
4	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	〃
5	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	にぶい黄褐色砂質土を含む
6	〃 (〃)	粘土質	にぶい黄色土を斑状に含む
7	〃 (〃)	〃	にぶい黄色土を多量に混入
SE 07			
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	黒褐色土、褐灰色土を多く含む
2	黒褐色(10YR3/1)	〃	灰黄褐色砂質土を斑状に含む
3	〃 (〃)	〃	炭化物を多く含む
4	〃 (2.5Y 3/1)	〃	暗灰黄色土を斑状に含む
5	オリーブ黒色(10Y 3/1)	粘土質	暗緑灰砂質土を混入
SE 08			
1	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	シルト	にぶい黄色土を斑状に含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	暗灰黄色土をブロック状に含む
3	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	〃	黒褐色土と炭化物を含む
4	黒色(10YR3/1)	〃	にぶい黄色土を斑状に含む
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	にぶい黄色土を多量に混入
6	黒色(10YR1.7/1)	粘土質	木炭層
7	黄灰色(2.5Y 4/1)	シルト	暗灰黄色砂質土を混入
8	黒褐色(2.5Y 3/1)	粘土質	灰オリーブ砂質土を斑状に含む
9	オリーブ黒色(7.5Y 3/1)	〃	灰オリーブ砂質土を混入
SE 10			
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	にぶい黄橙色土を斑状に含む
2	〃 (10YR3/1)	〃	にぶい黄橙色土と炭化物を含む
3	〃 (〃)	〃	にぶい黄橙色土、褐灰色土混入
4	〃 (〃)	〃	にぶい黄橙色土を多量に混入
5	黒色(10YR3/1)	粘土質	にぶい黄橙色土、褐灰色土含有
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〃
7	オリーブ灰色(10YR5/2)	砂質	褐灰色・黒色粘土質土の互層

第21図　SE 05・07・08・10実測図

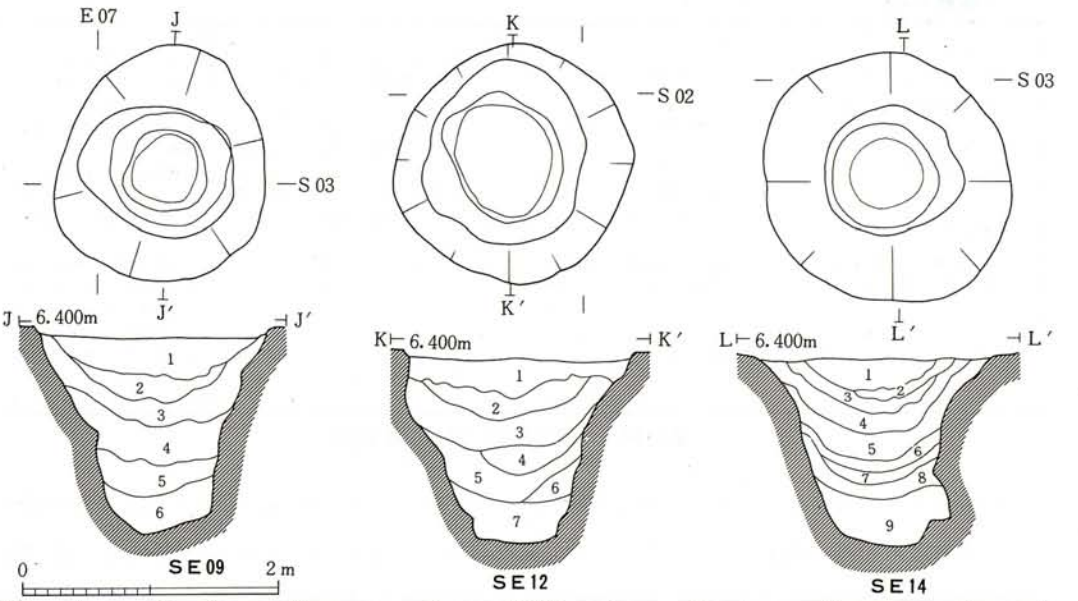
円形を呈するものと考えられる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃から上方で外傾するが上端近くで再び垂直に近くなる。規模は直径1.20m、深さは1.2mを計る。埋土は最下層が粘性に富む砂質土で、その上層には黒褐色土などがレンズ状に堆積している。遺物は土師器、中世陶器が出土している。

SE 11井戸跡　調査区中央部の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。SD 04・05溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は円形を呈し、壁は底面からわずかに外傾しながら立ち上がり、中頃から上方で傾斜がやや大きくなる。規模は直径2.35m、深さは1.9mを計る。埋土は下層に粘土質土が厚く堆積し、間層として砂質土が薄く堆積している。また上層には黒褐色土などがレンズ状に堆積している。遺物は土師器杯・高杯、須恵器甕、中世陶器、カワラケ、鉄滓が出土している。



No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SE06	土師器	甕	ロクロナデ、手持ヘラケズリ	ロクロナデ	(20.4)			外面にスス付着
2	SE08	カワラケ		ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ、ナデ	(12.6)	(8.0)	2.8	
3	SE09	〃		ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	(11.2)	(6.5)	3.2	内面にタール状の付着物
4	〃	円盤状製品		回転糸切り	ナデ				カワラケ底部を転用

第22図　SE06・08・09出土遺物

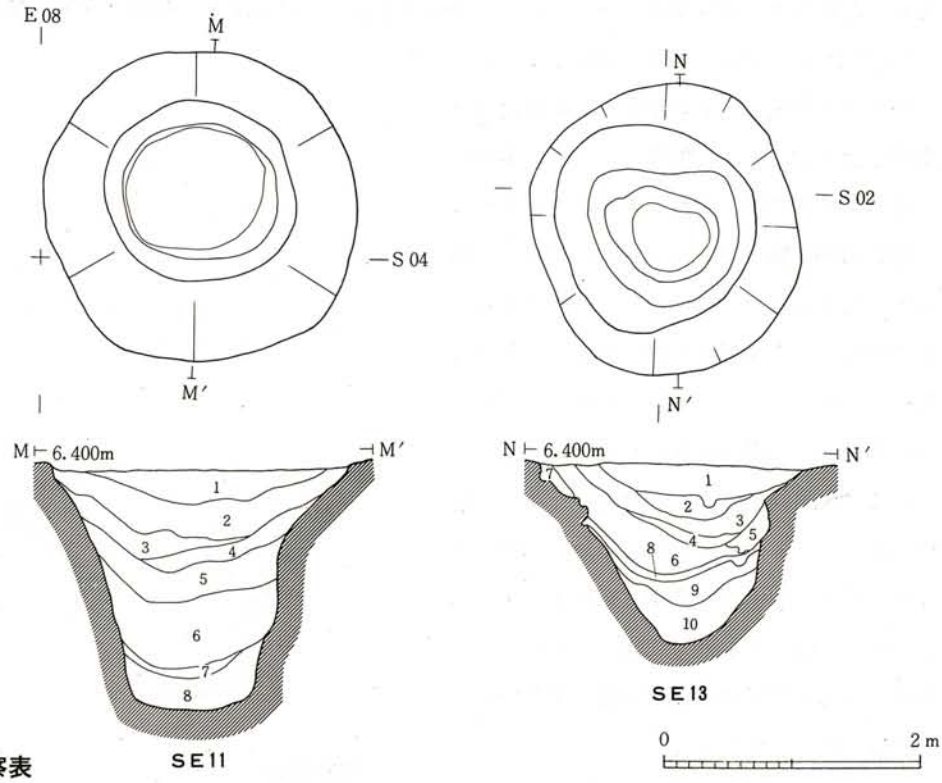


層位	土色	備考
SE09		
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
2	〃 (10YR3/1)	〃　〃
3	〃 (2.5Y 3/1)	〃　にぶい黄褐色土と炭化物を含む
4	黒色(5Y 3/1)	粘土質　灰オリーブ砂質土を含む
5	灰色(7.5Y 4/1)	〃　〃
6	灰オリーブ(7.5Y 5/2)	砂質　灰色粘土質土を混入
SE12		
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト　にぶい黄橙色土を斑状に含む
2	〃 (10YR3/1)	〃　にぶい黄褐色砂質土を混入
3	〃 (〃)	〃　にぶい黄橙色土を斑状に含む
4	〃 (2.5Y 3/1)	〃　灰オリーブ砂質土を混入
5	灰色(7.5Y 4/1)	粘土質　同色砂質土と黒色土を層状に含む
6	オリーブ黒色(10Y 3/1))	粘土質　灰オリーブ砂質土を層状に含む
7	灰オリーブ(7.5Y 5/2)	砂質　灰色粘土質土を層状に含む
SE14		
1	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	シルト　黄褐色土を斑状に含む
2	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	〃　〃
3	灰黄褐色(10YR4/2)	〃　炭化物を含む
4	〃 (〃)	〃　黄褐色土を斑状に含む
5	黒色(10YR1.7/1)	粘土質　木炭層
6	黒褐色(10YR3/1)	〃　灰オリーブ砂質土を混入
7	黒色(10YR1.7/1)	〃　木炭層
8	〃 (10YR3/1)	〃　下層との境に薄い木炭層を含む
9	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃　灰オリーブ砂質土を斑状に含む

第23図　SE09・12・14実測図

ＳＥ12井戸跡　調査区中央付近やや北側の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。平面形は円形を呈し、壁は底面からわずかに外傾しながら立ち上がり、中頃から上方で傾斜がやや大きくなる。規模は直径1.75m、深さは1.5mを計る。埋土は最下層に粘性に富む砂質土が堆積し、上層にはにぶい黄橙色などを斑状及びブロック状に含んだ黒褐色土が堆積している。遺物は土師器、中世陶器が出土している。

ＳＥ13井戸跡　調査区北東部の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＤ08溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は円形を呈し、壁は丸味をおびた底面から緩やかに外傾しながら立ち上がり、上端近くで段を有する。規模は直径1.70m、深さは1.5mを計る。埋土は下層に黒色及び黒褐色粘土質土が堆積し、中頃に木炭層を狭んで上層には黄褐色土を含んだ黒褐



土層観察表

層位	土色	備考	層位	土色	備考
ＳＥ 11			ＳＥ 13		
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト　炭化物、焼土粒を若干含む	1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト　黄褐色土を斑状に含む
2	黒褐色(10YR3/1)	〃　〃	2	〃 (10YR3/2)	〃　〃
3	〃 (〃)	〃　にぶい黄橙色土と黒色土を含む	3	〃 (10YR3/1)	〃　〃
4	灰色(N 5/)	〃　暗オリーブ灰色土を層状に含む	4	〃 (〃)	〃　木炭層を含む
5	黒色(10Y 3/1)	粘土質　灰色土を層状に含む	5	にぶい黄色(2.5Y 6/3)	〃　黒褐色土を混入
6	オリーブ黒色(10Y 3/1)	〃　灰オリーブ砂質土を混入	6	黒色(10YR1.7/1)	粘土質　木炭層
7	灰オリーブ(7.5Y 5/3)	砂質　一部グライ化	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト　黄褐色土を斑状に含む
8	黒色(7.5Y 3/1)	粘土質　やや砂質	8	〃 (10YR3/2)	粘土質　植物 遺体を含む
			9	黒色(10YR1.7/1)	〃　木炭層
			10	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃　灰オリーブ砂質土を混入

第24図　ＳＥ11・13実測図

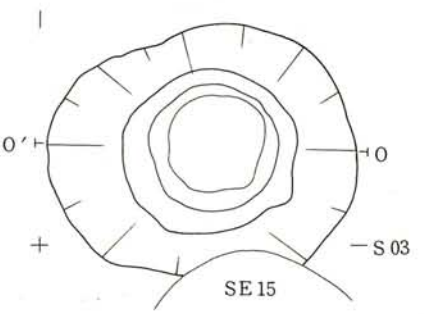
色土がレンズ状に堆積している。遺物は土師器杯、丸瓦、漆器椀（第27図１）が出土している。

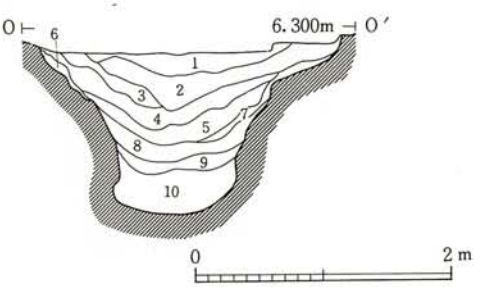
ＳＥ14井戸跡　調査区東側の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＥ13井戸跡の南東側に近接して位置する。平面形は円形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がり、上端近くで傾斜がやや大きくなる。規模は直径1.85m、深さ1.45mを計る。埋土は下層に黒色粘土質土が主体となって堆積し、上層は炭化物を含む灰黄褐色土などがレンズ状に堆積している。また、これらの中頃に木炭層が間層として入る。遺物は土師器、須恵器、中世陶器、カワラケ、青磁（第27図５）が出土している。

ＳＥ15井戸跡　調査区北東側に設定した拡張区の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＤ08溝跡、ＳＥ16井戸跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は円形を呈し、壁は丸味をおびた底面よりほぼ垂直に立ち上がり、中頃より上方で外傾する。規模は直径1.70m、深さ1.4mを計る。埋土は下層に砂質土を含んだ黒褐色土が堆積し、その上層には暗褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積している。遺物は土師器、須恵器壺、中世陶器が出土している。

ＳＥ16井戸跡　調査区北東側に設定した拡張区の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。重複関係からＳＥ15井戸跡より古く、ＳＤ08溝跡より新しい。平面形はやや形のくずれた円形を呈する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃から上方で大きく外傾する。規模は直径2.35m、深さ1.35mを計る。埋土は10層に細分できるが、上層は黒褐色土が主体となり、各層の間に大きな違いはみられない。遺物は土師器、須恵器甕、青磁（第17図８）、三筋壺が出土している。

ＳＥ17井戸跡　調査区北西部の第Ⅲ層上面で検出した井戸跡である。ＳＥ06井戸跡の北西側に近接して位置する。ＳＤ06溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は円形を呈する。壁は丸味をおびた底面からほぼ垂直に立ち上がり、中頃で大きな段を有し、上端付近で再び垂直に近くなる。規模は直径1.





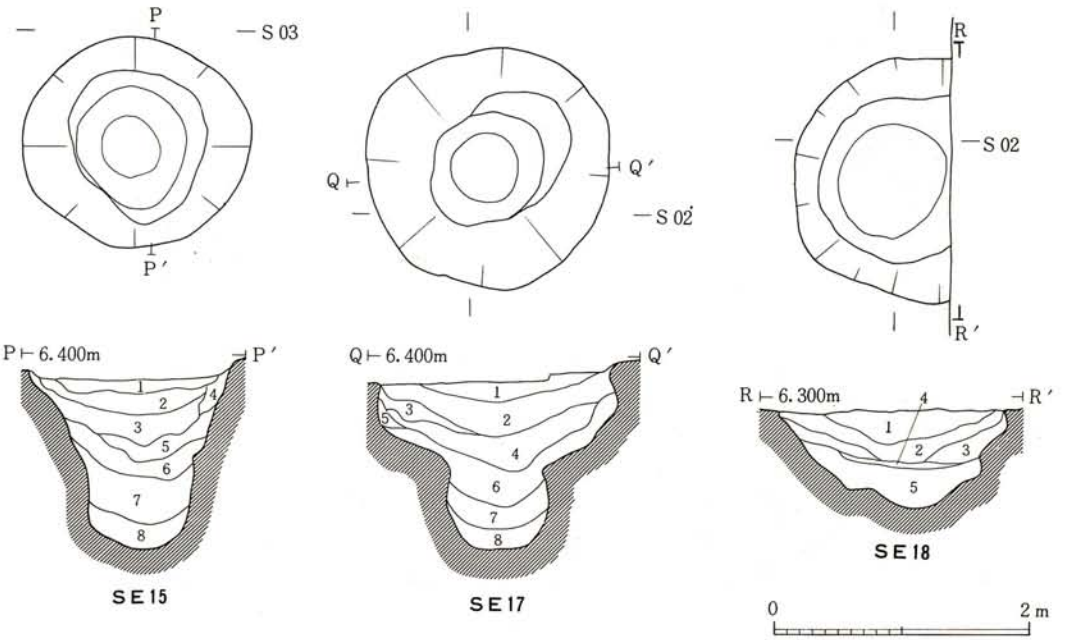
土層観察表

層位	土色		備考	
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	炭化物を若干含む
2	〃	(10YR3/1)	〃	炭化物を含む
3	〃	(〃)	〃	上層よりしまあり
4	〃	(〃)	〃	黒褐色土を含む
5	黒色	(10YR3/1)	〃	灰色砂質土を層状に含む
6	オリーブ褐色	(2.5Y 5/4)	〃	灰色砂質土を含む
7	灰色	(10Y 5/1)	粘土質	
8	オリーブ褐色	(2.5Y 5/4)	砂質	粘性あり、黒褐色土を含む
9	黄灰色	(2.5Y 5/1)	シルト	〃
10	灰色	(7.5Y 5/1)	〃	黄色粘土質土を層状に含む

第25図　ＳＥ16実測図

85m、深さ1.4mを計る。埋土は下層で砂質土が層状に入っているのが観察できる。上層は黒褐色土を主体とする土層がレンズ状に堆積している。遺物は土師器甕、須恵器、中世陶器、カワラケ（第27図３・４）、青磁（第27図６・７）、曲物底板（第27図２）が出土している。

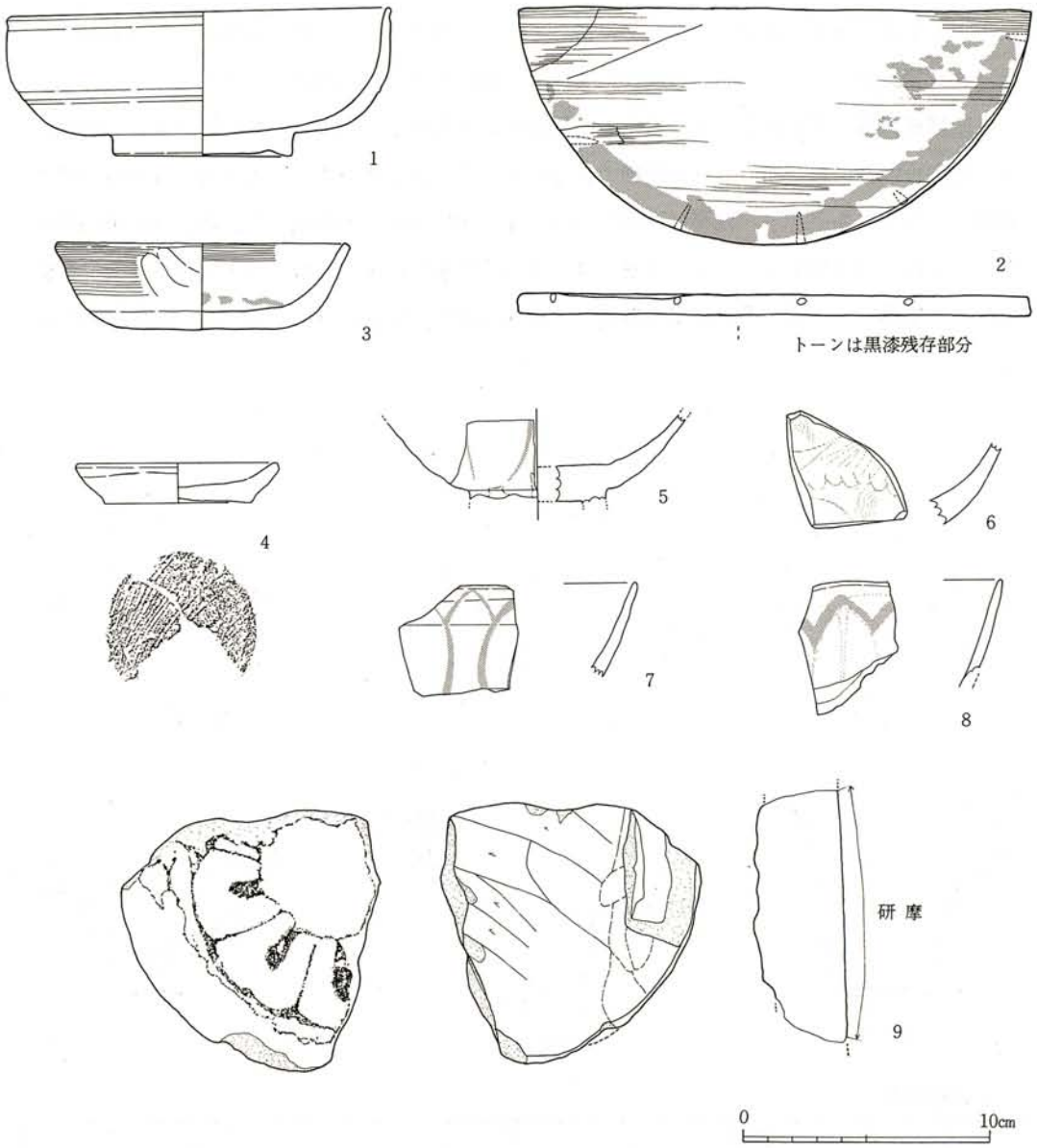
ＳＥ18井戸跡　調査区北東側に設定した拡張区の第Ⅲ層上で検出した井戸跡である。平面形は一部調査区外に延びているため明確ではないが、ほぼ円形を呈するものと考えられる。壁は外傾しながら立ち上がる。規模は直径1.75m、深さは0.85mまで検出した。埋土は中頃に堆積した灰色粘土質土層を境にして、下層にはにぶい黄橙色砂質土、上層には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積している。遺物は須恵器甕、赤焼き土器杯、軒丸瓦（第27図９）、中世陶器が出土している。



土層観察表

層位	土色	備考	
ＳＥ 15			
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	にぶい黄橙色土を斑状に含む
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	〃
3	〃 (〃)	〃	黄褐色土をブロック状に含む
4	暗褐色(10YR3/3)	〃	黒褐色土をブロック状に含む
5	〃 (10YR3/4)	砂質	〃
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	暗褐色砂質土を層状に含む
7	〃 (〃)	〃	灰オリーブ砂質土を含む
8	灰オリーブ(5Y 5/3)	砂質	黒褐色土を含む
ＳＥ 17			
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄褐色土と炭化物を含む
2	〃 (〃)	〃	上層より粘性ややあり
3	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物を含む
4	黒褐色(10YR3/1)	〃	〃
5	黄褐色(2.5Y 5/4)	〃	黒褐色土を含む
6	黒褐色(10YR3/2)	〃	灰色砂質土を層状に含む
7	オリーブ黒色(10Y 3/1)	〃	〃
8	灰色(10Y 5/1)	〃	オリーブ黒色土を混入
ＳＥ 18			
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	にぶい黄褐色土と炭化物を含む
2	〃 (10YR3/1)	〃	にぶい黄橙色砂質土を含む
3	〃 (〃)	〃	２層含有土を多量に混入
4	灰色(5Y 5/1)	粘土質	上・下層の境に薄い木炭層を含む
5	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質	灰色砂質土と黒褐色土を混入

第26図　ＳＥ15・17・18実測図



No.	遺 構	種 類	器形	備 考
1	ＳＥ13	漆 器	椀	内外面黒漆塗り　体部外面に稜をもつ　　口径16.0cm、器高5.8cm、底径7.3cm
2	ＳＥ17	曲 物	底板	柾目材　片面に黒漆が残存し、釘孔が５ケ所あり　　径20.1cm
3	〃	カワラケ		外面ヨコナデ、ナデ　内面ヨコナデ←底部指ナデ、油煙痕　　口径12.0cm、器高3.5cm
4	〃	〃		内外面ロクロナデ　底部静止糸切り　　口径8.3cm、底径3.1cm、器高1.6cm
5	ＳＥ14	青 磁	椀	外面に蓮弁削り出し
6	ＳＥ17	〃	〃	内面にヘラ描きによる文様
7	〃	〃	〃	外面に蓮弁削り出し
8	ＳＥ16	〃	〃	〃
9	ＳＥ18	軒 丸 瓦		単弁蓮華文　　瓦当裏面布目痕、ヘラケズリ→研摩

第27図　ＳＥ13･14･16～18出土遺物

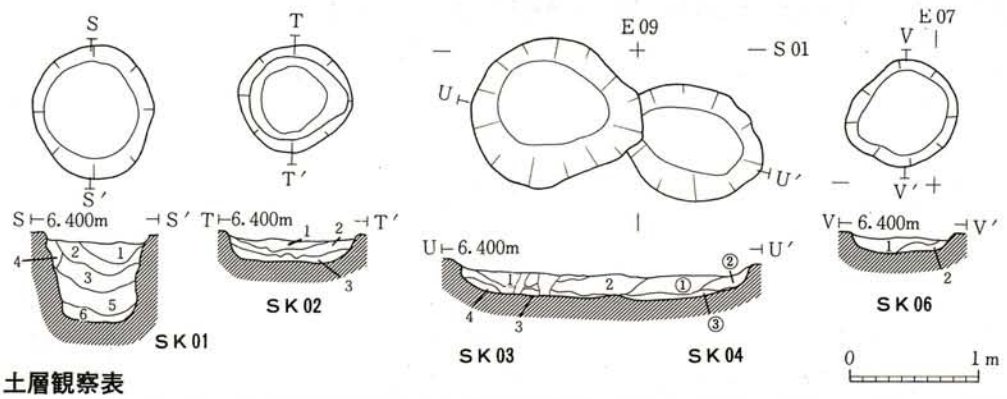
(5) 土　壙

ＳＫ01土壙　調査区中央部の第Ⅲ層上面で検出した土壙である。ＳＥ08井戸跡の西側に近接して位置する。平面形は円形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から、わずかに外傾して立ち上がる。規模は直径0.85m、深さは0.7mを計る。埋土は下層が黒褐色土、上層が黄褐色土を主体とした土層がレンズ状に堆積している。また、それぞれの土層には地山土が斑状及びブロック状に含まれる。遺物は土師器、須恵器甕、カワラケ、漆器椀が出土している。

ＳＫ02土壙　調査区北側の中央付近で検出した土壙である。ＳＥ12井戸跡の北側に近接して位置する。平面形は円形を呈し、壁は平坦な底面から内弯気味に立ち上がる。規模は直径1.04m、深さ0.2mを計る。埋土は、にぶい黄褐色土を含んだ黒褐色土と灰黄褐色土に分けられる。遺物は出土していない。

ＳＫ03土壙　調査区北側の中央付近の第Ⅲ層上面で検出した土壙である。ＳＫ04土壙、ＳＤ08溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。平面形は楕円形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から内弯気味に立ち上がる。規模は長径1.55m、短径1.25mで深さは0.3mを計る。埋土は、下層がにぶい黄褐色土を主体とし、上層は黒褐色土が堆積している。遺物は土師器、中世陶器、轡（第29図１）、鉄釘（第29図２）が出土している。

ＳＫ04土壙　調査区北側の中央付近の第Ⅲ層上面で検出した土壙である。重複関係よりＳＫ



土層観察表

層位	土　色	備　考
ＳＫ 01		
1	黄　灰　色(2.5Y 4/1)	シルト　黄褐色砂質土を斑状に含む
2	暗 灰 黄 色(2.5Y 4/2)	〃　〃
3	黄　褐　色(2.5Y 5/3)	砂質土　黒褐色土を混入
4	暗 灰 黄 色(2.5Y 4/2)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
5	黒　褐　色(2.5Y 3/1)	〃　〃
6	〃　(　〃　)	粘土質　上層より色調が濃い
ＳＫ 02		
1	黒　褐　色(10YR3/1)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
2	〃　(10YR3/2)	〃　〃
3	灰 黄 褐 色(10YR5/2)	〃　やや砂質気味

層位	土　色	備　考
ＳＫ 03		
1	黒　褐　色(10YR3/1)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃　黒褐色土を混入
3	〃　(10YR5/3)	〃　〃　やや砂質
4	褐　灰　色(10YR5/1)	〃　にぶい黄褐色土を斑状に含む
ＳＫ 04		
①	黒　褐　色(10YR3/1)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
②	灰 黄 褐 色(10YR5/2)	〃　〃
③	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃　黒褐色土を斑状に若干含む
ＳＫ 06		
1	黒　褐　色(10YR3/1)	シルト　にぶい黄褐色土を斑状に含む
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	〃　黒褐色土を斑状に若干含む

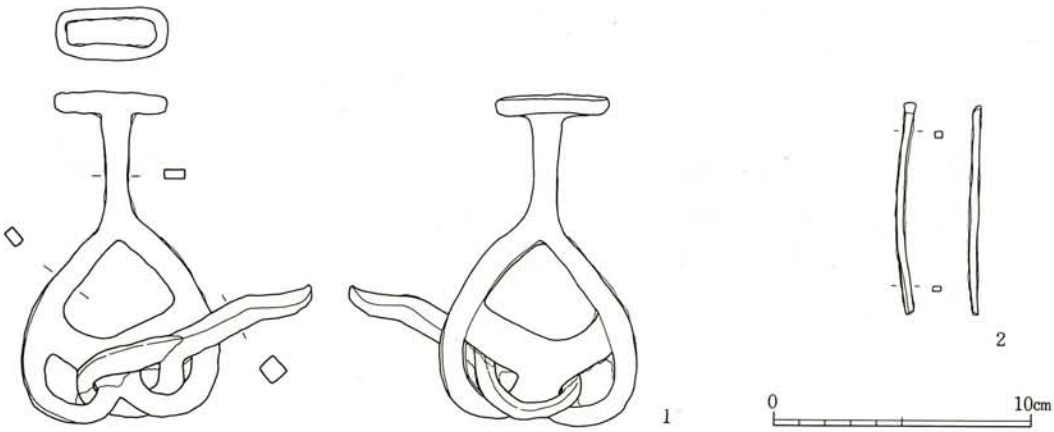
第28図　ＳＫ01～04・06実測図

03土壙より古く、ＳＤ08溝跡より新しい。平面形は楕円形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から内弯気味に立ち上がる。規模は西端をＳＫ03土壙に切られているため正確な数値は不明であるが、長径1.2m以下、短径0.90mで深さは0.3mを計る。埋土は底面付近にやや砂質気味のにぶい黄褐色土が堆積し、上層は黒褐色土と灰黄褐色土に分けられる。遺物は中世陶器擂鉢が出土している。

ＳＫ05土壙　調査区中央付近の第Ⅲ層上面で検出した土壙である。重複関係よりＳＥ07井戸跡より古く、ＳＤ07溝跡より新しい。平面形、規模等はＳＥ07井戸跡に大部分が切られているため不明である。埋土は灰黄褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ06土壙　調査区北側の第Ⅲ層上面で検出した土壙である。ＳＤ05溝跡と重複関係にあり、これより新しい。平面形は円形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から内弯気味に立ち上がる。規模は直径0.82m、深さ0.15mを計る。埋土は黒褐色土とにぶい黄褐色土に分けられる。遺物は出土していない。

ＳＫ07土壙　調査区南東部の地山上で検出した土壙である。重複関係よりＳＤ02溝跡より古く、ＳＩ01住居跡、ＳＢ06建物跡より新しい。平面形はＳＤ02溝跡によって南半部が切られているため不明である。底面は平坦に近く、壁は内弯気味に立ち上がる。規模は残存部分で径2.23m、深さ0.25mを計る。埋土は、やや砂質気味の暗褐色土と灰黄褐色土の２層に分けられる。遺物はロクロ未使用の土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。



No.	種　類	備　　考
1	鉄製品 轡	馬具
2	〃　釘	先端部欠損　　残存長 8.3m

第29図　ＳＫ03出土遺物

2．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、手づくね土器、中世陶器、カワラケ、青磁、瓦、砥石、木製品、金属製品等である。出土量は平箱約6箱分で、さほど多い量とはいえない。また、遺構内出土の遺物も全体的に破片が多く、全体の形態がわかるものは数少ない。したがって、ここでは製作技術や特徴によって分類することは行なわず、図示できたものについて個々に記述するだけにとどめたい。

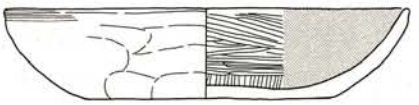
(1) 土師器

土師器には杯、高杯、甕の器種がある。このうち杯と甕の出土量が多く、両者の割合はおよそ1：2である。高杯については少破片が2点出土しているのみである。

〈杯〉

製作の際にロクロを使用しないものと、使用したものに分けられる。出土量は後者が上まわる。前者については、外面の口縁部から体部にかけてヘラミガキ、底部付近がヘラケズリ調整されているものが多く観察できる。後者については、底部を回転糸切りによって切り離し、再調整をもたないものが多い。また、両者とも内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。図示できたものは3点である。

第14図3　ＳＤ02溝跡から出土したロクロ未使用のものである。平底を呈し、体部から口縁部にかけて内弯して立ち上がる。器面調整は摩滅のため明瞭ではないが、外面は口縁部をヨコナデ、底部から体部にかけてヘラケズリ調整が観察できる。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、底部では一定方向にヘラミガキが施されている。なお、製作技法や器形の特徴などから東北地方南半における土師器形式編年でいう国分寺下層式に比定できるものと考えられるが、これより新しい時期の遺物と混在して出土している。

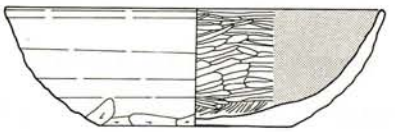


(第14図3)

第15図1　ＳＤ04溝跡から出土したロクロ使用のものである。底部は回転糸切りによって切り離した後、再調整をもたない。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部で直線的に外傾する。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、特に底部にはヘラミガキが放射状に施されているのが明瞭に観察できる。

(第15図1)

第15図3　ＳＤ05溝跡から出土したロクロ使用のものである。底部全面と体部下端にかけて丁寧に手持ちヘラケズリ調査が施されており、切り離し痕跡



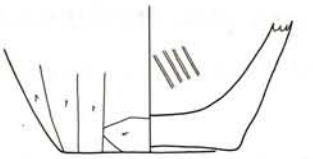
(第15図3)

は観察できない。体部から口縁部にかけては内弯して立ち上がる。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、底部でのヘラミガキの方向は一定していない。

〈甕〉

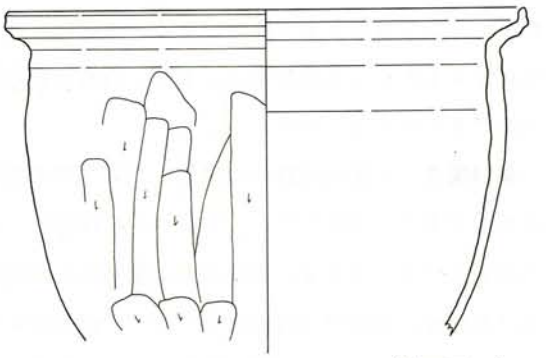
製作の際にロクロを使用しないものと、使用したものに分けられる。両者の出土量はほぼ同じである。前者については、外面の体部に縦方向の刷毛目が施されているものが圧倒的に多く、内面は刷毛目とヘラナデが施されているものに分けられる。甕で図示できたものは２点のみである。

第８図１　ＳＩ01住居跡の床面上から出土したロクロ未使用のもので、底部と体部下端のみの資料である。外面は縦方向へのヘラケズリが施され、内面は摩滅が著しいが、一部刷毛目の痕跡が認められる。また、底部には木葉痕が観察でき



（第８図１）

第22図１　ＳＥ06井戸跡の上層から出土したロクロ使用のものである。体部下端から底部を欠くため全体の形態は不明であるが、口径が最大径となる鉢状を呈するものと推定される。口縁部は短く外返し、端部が上方につまみ出されている。外面の体部には縦方向にヘラケズリが施されている。また、口縁部から体部にかけてスス状の付着物が観察できる。



（第22図１）

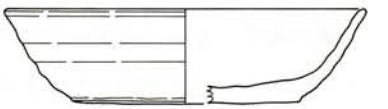
(2)　須恵器

須恵器には杯、蓋、甕、壺の器種がある。このうち甕の出土量が圧倒的に多く、杯がこれに次ぐ。蓋と壺については出土量が少ないうえ、全て破片のため図示できたものはない。

〈杯〉

溝跡や堆積土第Ⅲ層中からの出土が多い。底部資料はさほど多くないが、観察できる底部の切り離し技法はすべて回転ヘラ切りである。また切り離し後、再調整をもたないものが大部分を占め、一部底部周縁を簡単にナデ調整しているものが認められる。杯で図示できたものは２点である。

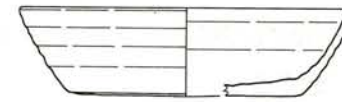
第８図２　ＳＢ01建物跡東側柱列の北壁際柱穴の掘り方底面から出土したものである。底部付近を中心に全体の約¼が残存している。底部は回転ヘラ切りの後、周縁



（第８図２）

部にかけて直線的に外傾する。

第15図４　ＳＤ06溝跡から出土したもので、全体の約¼が残存している。底部は回転ヘラ切りの後、周縁を簡単にナデ調整している。体部は内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。また、内外面ともロクロナデの痕跡が顕著に残る。

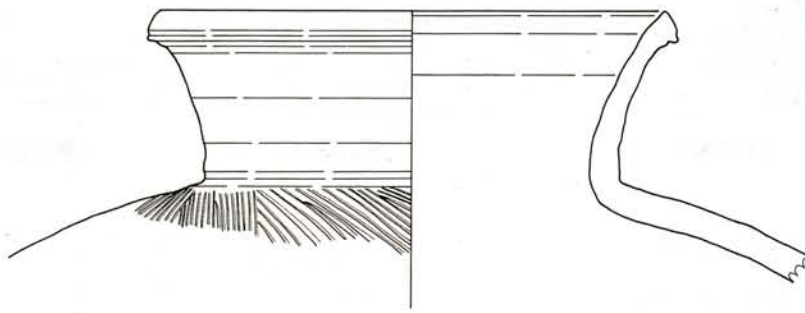


（第15図４）

〈甕〉

ＳＤ05溝跡を中心に多く出土しているが、ほとんどが破片資料である。体部の外面で平行叩き目、内面で無文のあて具痕が観察できるものが多い。このほか、内面では同心円文のあて具痕も認められる。甕で図示できたものは１点のみである。

第15図５　ＳＤ05溝跡から出土した口縁部から肩部にかけての資料である。最大径が肩部あるいは体部にあるものと思われる。口縁部は外反して、端部で下方にわずかにつまみ出されている。肩部外面には平行叩き目が認められる。



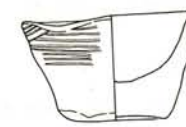
（第15図５）

(3)　赤焼き土器

赤焼き土器には杯、皿の器種がある。溝跡や井戸跡を中心に出土しているが、すべて小破片のため図示できたものはない。底部の資料は回転糸切りによってロクロから切り離し、その後再調整をもたないという点で共通している。

(4)　手づくね土器

ＳＤ05溝跡から１点出土している（第15図２）。厚手の底部をもち、体部は直線的に外傾して立ち上がり、器厚を減じながら口縁部に至るものである。内外面とも摩滅のため調整は判然としないが、口縁部外面で刷毛目の痕跡が認められる。



（第15図２）

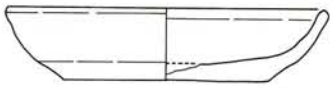
(5)　中世陶器

ここで中世陶器としたものは、すべて無釉のものである。ＳＤ01・02溝跡や井戸跡を中心に出土しているが、すべて破片のため図示できたものはない。出土したものは褐色及び赤褐色を

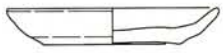
呈した常滑系の甕と、灰色を呈した須恵質の擂鉢に分けられる。前者については、肩部及び体部の外面に格子状と矢羽根状の叩き目が認められるものがある。後者は口縁端部が丸くおさまり、内面には筋目等がみられないものである。

(6) カワラケ

井戸跡を中心に出土している。形態の特徴から杯状を呈するものと、小形の皿状を呈するものに大きく分けられる。さらに、前者については製作の際にロクロを使用したもので、底部が回転糸切りされているもの（第22図２）と、ロクロを使用せず丸底気味の底部をもち、内外面の口縁部から体部にかけてヨコナデが施されているもの（第22図３・第27図３）がある。後者については製作の際にロクロを使用したもので、底部が回転糸切りのもの（第14図１）と静止糸切りのもの（第27図４）がある。

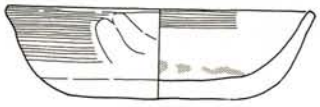


（第22図３）

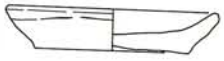


（第14図１）

（第22図２）



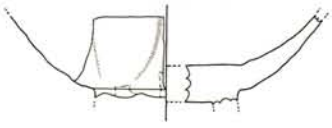
（第27図３）



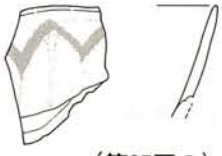
（第27図４）

(7) 青磁

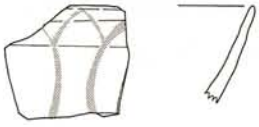
すべて井戸跡から出土している。いずれも破片資料であるが、図示できたものが４点ある。これらには、外面に蓮弁文が削り出されているもの（第27図５・７・８）と、内面にヘラと櫛によって花文が描かれているもの（第27図６）がある。



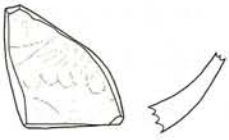
（第27図５）



（第27図８）



（第27図７）



（第27図６）

(8) 瓦

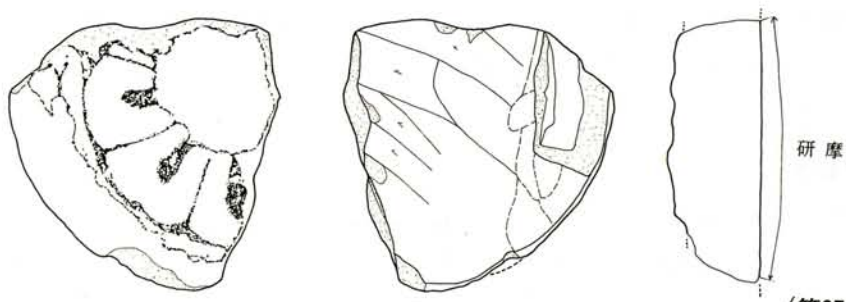
軒丸瓦、丸・平瓦がおもにＳＤ04・05溝跡から出土しているが、出土量はさほど多くない。

丸瓦はすべて破片であるが、形態は玉縁付きの有段丸瓦である。凸面はほぼ全面にロクロナデによる調整痕がみられ、調整のおよばない部分ではそれ以前の工程の縄叩き目が観察できる。一方凹面には布目痕が残るものである。

平瓦は凹面に布目、凸面に縄叩き目が残るもので、両面とも調整が施されていないものが多

い。また、ナデ調整が施されているものもあるが、調整は部分的な範囲に限られている。

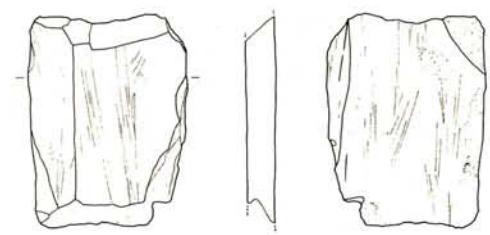
軒丸瓦（第27図９）は、ＳＥ18井戸跡の遺構確認面近くから出土したものである。瓦当面の約¼が残存しているもので、周縁と中房が欠損している。残存状況から８弁の単弁蓮華文軒丸瓦であろうと推定される。花弁はやや平坦で、先端部は丸味をおびている。子葉は細みの棒状をなす。また、周縁の内側に一条の圏線が巡っている。瓦当裏面にはヘラケズリが施されており、それがおよばない部分には布目痕が残る。さらに中央付近が研摩されており、瓦としての使用後転用された可能性がある。なお、これと同系統の軒丸瓦は多賀城跡政庁跡（註２）、仙台市大蓮寺窯跡（註３）、仙台市郡山遺跡（註４）、古川市名生館遺跡（註５）などから出土している。



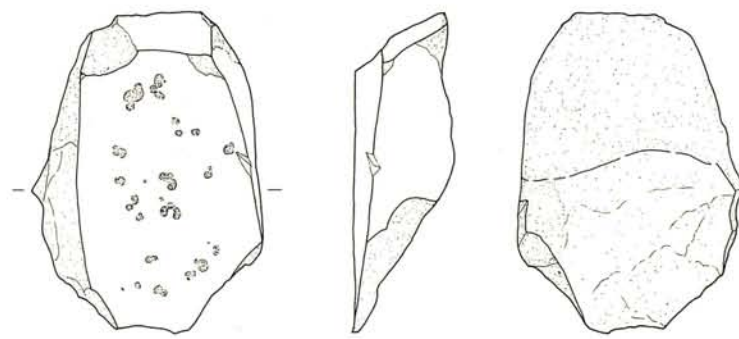
（第27図９）

(9) 砥石

比較的大形のものが２点出土している。第16図３はＳＤ07溝跡から出土したもので、扁平な素材を用いて方形に整形している。石質は粘板岩系で、砥面の滑らかさから仕上砥～中砥に使われたと思われる。上・下面と両側面の４面が砥面として利用されており、各砥面には擦痕が認められる。一方、第18図２はＳＥ02井戸跡から出土したもので、台形状の断面形態を呈する。石質は砂岩系で、粒子が粗いことから粗砥的に使われたと思われる。残存部の観察か



（第16図３）



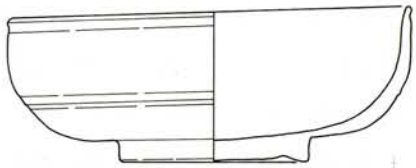
（第18図２）

ら上面と片側面の２面が砥面として利用されていたことが確認できる。

⑽　木製品

木製品には漆器、曲物容器等がある。

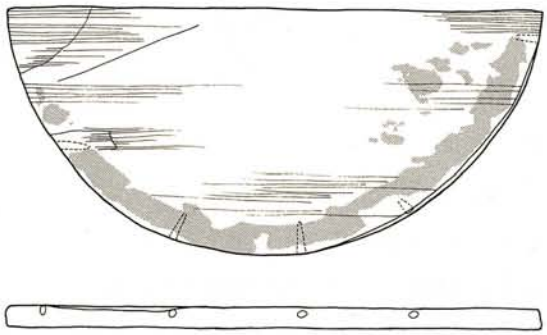
〈漆器〉



（第27図１）

椀が２点出土している。このうち１点は、ＳＫ01土壙から出土しているが、腐食が著しく図示できなかった。内・外面とも黒漆が塗られているものである。第27図１はＳＥ13井戸跡から出土した、ほぼ完形のものである。直立する高台をもち、底面の周縁部が斜めに削り込まれている。体部は内弯して立ち上がり、外面の体部下半にロクロ挽出しによる稜線が認められる。また、底面を除いた内・外面ともに黒漆が塗られている。文様はみられない。

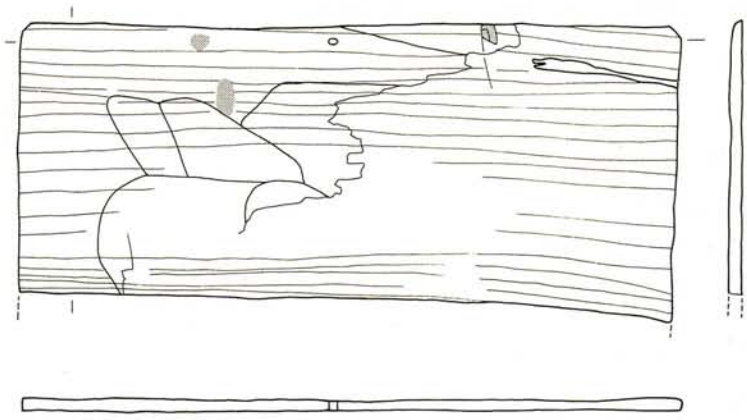
〈曲物容器〉



（第27図２）

ＳＥ17井戸跡から底板が出土している（第27図２）。柾目材を使用したもので、内面にあたると思われる片面の周辺には黒漆が残存している。また側端には、側板を取りつける際の木釘孔が５ケ所で認められる。

〈板状木製品〉



（第18図１）

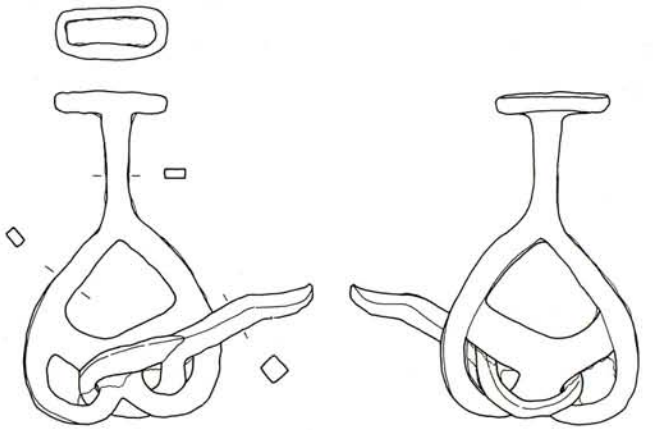
ＳＥ02井戸跡から出土している（第18図１）。板目材を使用したもので、片面に削りで整形した痕跡が認められる。また残存している２ケ所の角も、わずかではあるが隅切りされている。このほか、残存する一辺の周縁中央部で木釘孔が１ケ所認められる。

(11) 金属製品

金属製品には馬具、鉄釘、古銭がある。

〈馬具〉

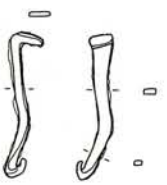
轡がＳＫ03土壙から出土している（第29図１）。鉄製のもので、片側だけが残存している。鏡部は比較的小さく、外周は逆ハート形を呈する。また喰の輪違部は、残存している状況では鉤状を呈する。なお、引手部は残存していない。



（第29図１）

〈鉄釘〉

ＳＤ02溝跡とＳＫ03土壙から出土している（第14図４、第29図２）。前者は扁平な長方形を呈する断面形をもち、上部が短く曲げられている。後者は方形の断面形をもつもので、先端が欠損している。

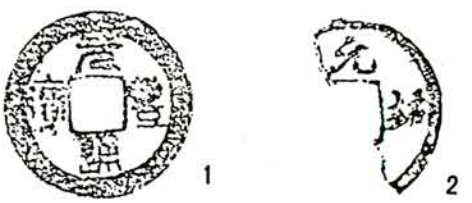


（第14図４）

（第29図２）

〈古銭〉

調査区北西部の堆積土第Ⅱ層中から「元豊通宝」と「元祐通宝」が出土している（第30図１・２）。いずれも北宋銭である。



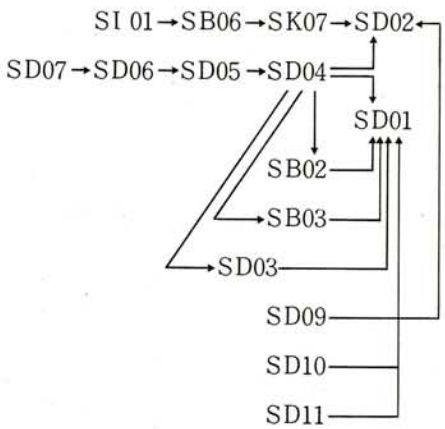
（原寸大）

第30図　出土遺物（古銭）

V　考　　察

新田遺跡（第10次調査）で発見された遺構は、竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡６棟、溝跡11条、井戸跡18基、土壙７基、及び多数の小柱穴である。これらの遺構を検出面と重複関係から整理を行なうと下記のようになる。

検出面　地山面



第三層との関係が不明

SK02

第三層上面

SE01
SE02
SE10→SE03
SD08

SB01
SB04
SK01･05（重複関係は不明）
SK04
SK05→SK03
SK06→SE07
SE04
SE05
SE06
SE08
SE09
SE11
SE12
SE13
SE14
SE16→SE15
SE17
SE18

発見された遺構の時期は、検出面及び出土遺物から見ると、大きく古代に属するものと、中世に属するものとに大別される。古代に属する遺構には地山面で発見されたＳＩ01住居跡、ＳＢ06建物跡、ＳＫ07土壙、ＳＤ04～07溝跡がこれに相当する。この内ＳＩ01住居跡、ＳＢ06建物跡、ＳＫ07土壙は隣接した場所で重複関係が有り、ＳＩ01住居跡→ＳＢ06建物跡→ＳＫ07土壙といった変遷が判明している。これらの遺構は、南側をＳＤ02溝跡によって失なっているため全容を知ることはできなかったが、出土した遺物には、ロクロ未使用の土師器杯・甕などが含まれ、中には回転ヘラ切り無調整の須恵器杯が含まれることから上記遺構の年代は、おおむ

ね８世紀後半頃から９世紀代と理解している。またＳＩ01住居跡、ＳＢ06建物跡は重複関係が認められるものの、主軸方位がほとんど同じであることから、両者は、同時代の範囲の中で機能していたと考えられる。次にＳＤ04～07溝跡について見ると、ＳＤ04溝跡の埋土中には10世紀前半頃に降下したと考えられる灰白色火山灰を含むことから、灰白色火山灰降下以前にはこの溝跡は機能を停止していたものと考えられる。このＳＤ04溝跡を中心として年代を考えればＳＤ05～07溝跡は重複関係によりＳＤ04溝跡より古いことが判明している。更にＳＤ07溝跡はＳＤ05・06溝跡よりも古いことも判明している。（但しＳＤ05溝跡とＳＤ06溝跡の関係は不明となっている）。以上のような関係を踏まえて、四者の溝跡は出土した遺物の技法的な特徴から大きく９世紀代から10世紀前半頃に収まれるものと考えられる。

今回、調査によって発見された遺構の中で主体となっているものが、中世の所産と考えられる遺構群である。これにはＳＢ01～05掘立柱建物跡、ＳＤ01～03・08～11溝跡、ＳＥ01～18井戸跡、ＳＫ01～06土壙がある。これらの遺構群には、層位的には第Ⅲ層上面で検出したものと地山上で検出した遺構とに区別されるものがある。しかし、第Ⅲ層は調査区全域には堆積しておらず、また、表土剥離の段階で第Ⅲ層を除去した部分もある。これらについては、遺構の重複関係、もしくは出土遺物等から時期を決定している。またＳＤ03・08～11溝跡は地山上で検出したもので中世に属する遺構群とは面的に異なるものも認められるが、遺物がないため年代等については言及できない。前述の状況をふまえて掘立柱建物跡から考えて行くことにする。建物跡は５棟発見している。層位的に見れば、第Ⅲ層上面で発見されたＳＢ01建物跡、ＳＢ04・05建物跡と地山上で発見されたＳＢ02・03建物跡の２時期に分類されるが、調査区南側では第Ⅲ層がないために時期差があるとは言い難い面がある。これらの建物跡については規模、分布状況からは規格性は窺うことはできないが、掘り方埋土、建物跡の主軸方位等については規則性がある程度窺えるため、ほぼ同時期に機能した建物跡と理解している。尚、ＳＢ04・05掘立柱建物跡についてはその在り方より少なくとも２時期の変遷が考えられる。しかし、重複関係については直接切り合いがなく、出土遺物もないことから年代については不明である。

中世掘立柱建物跡一覧

遺　構　名	南北×東西（規模）	桁行(m)	梁行(m)	方　位	備　　考
ＳＢ01掘立柱建物跡	４間以上×４間以上		5.65m	S-2°-W	廂が取り付く
ＳＢ02掘立柱建物跡	２間以上×２間以上	2.51m	2.43m	N-5°-E	
ＳＢ03掘立柱建物跡	２間以上×３間以上	4.14m	3.70m	N-3°-E	
ＳＢ04掘立柱建物跡	２間以上×２間以上		2.50m	N-3°-N	
ＳＢ05掘立柱建物跡	３間以上×２間以上	4.08m		N-3°-N	

溝跡は７条発見した。これらの中には、東西溝であるＳＤ01・02溝跡、弧状を描くＳＤ03溝跡、調査区内を北側より東側にかけて斜走するＳＤ08溝跡がある。この他に、ＳＤ09～11溝跡のように方向、間隔、幅がほぼ均一に走る溝跡が認められた。この内ＳＤ01・02溝跡は調査区南側で発見されたもので、その方向もほぼ発掘基準線に沿っている。しかも両者の間隔もほぼ同一数値を示すものである。規模、埋土等について見ると、ＳＤ01溝跡が上幅0.4m～0.9mを計り、埋土は黒褐色土ににぶい黄橙色土を含むことが特徴である。これに対しＳＤ02溝跡は、溝跡の南端が調査区外に延びているため、規模は不明となっているが、埋土の相違から少なくとも４時期以上の変遷が考えられている。溝の間隔もほぼ均一で、平行に走るものである。これらの溝跡についてはＳＤ01溝跡が単独で存在するのに対し、ＳＤ02溝跡は４時期の変遷がある。両者のセット関係までは言及できないが、出土遺物には、接合するものもあり、このことからある１時期には同時に機能していたものと推定される。尚、ＳＤ02溝跡については、その方向から新田遺跡第７次調査で発見されたＤ－７溝跡と埋土が比較的、類似することから同一の溝跡と考えている。

井戸跡は18基発見された。いずれも素掘りのものである。これらの井戸跡については、平面形、深さの他に、断面形態に相違が認められるために、３つの形態に分類される。以下、順を追って説明する。

Ⅰ類

平面形は円形を呈し、壁は平坦面を呈する底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

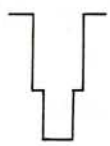
遺構名	平面形	直径	深さ	検出面	備考
ＳＥ01井戸跡	円形	1.13m	1.2m	地山	
ＳＥ02井戸跡	円形	1.06m	1.4m	地山	
ＳＥ03井戸跡	円形	1.15m	1.4m	地山	ＳＥ10井戸跡より新しい

Ⅱ類

平面形は円形もしくは楕円形を呈し、壁は平坦面または丸味を帯びた底面よりほぼ垂直に立ち上がり、中頃から上方に向かって広がる。

遺構名	平面形	直径	深さ	検出面	備考
ＳＥ06井戸跡	円形	2.68m	1.5m	第Ⅲ層	
ＳＥ09井戸跡	楕円形	1.85m×1.70m	1.6m	第Ⅲ層	
ＳＥ11井戸跡	円形	2.35m	1.9m	第Ⅲ層	
ＳＥ12井戸跡	円形	1.75m	1.5m	第Ⅲ層	
ＳＥ13井戸跡	円形	1.70m	1.5m	第Ⅲ層	
ＳＥ14井戸跡	円形	1.85m	1.45m	第Ⅲ層	
ＳＥ15井戸跡	円形	1.70m	1.40m	第Ⅲ層	ＳＥ16井戸跡より新しい
ＳＥ16井戸跡	円形	2.35m	1.35m	第Ⅲ層	ＳＥ15井戸跡より古い
ＳＥ18井戸跡	円形	1.75m	0.85m	第Ⅲ層	

Ⅲ類



平面形は円形を呈し、壁は底面から上端にかけてほぼ垂直に立ち上がり、中頃で明瞭な段を持つ。

遺構名	平面形	直径	深さ	検出面	備考
ＳＥ04井戸跡	円形	0.96m	1.2m	第Ⅲ層	
ＳＥ05井戸跡	円形	1.40m	1.3m	第Ⅲ層	
ＳＥ07井戸跡	円形	1.20m	1.3m	第Ⅲ層	
ＳＥ08井戸跡	円形	1.58m	1.4m	第Ⅲ層	
ＳＥ10井戸跡	円形	1.20m	1.2m	地山	ＳＥ03井戸跡より古い
ＳＥ17井戸跡	円形	1.85m	1.4m	第Ⅲ層	

３類に分類した井戸跡を各グループ毎に見ると、ある程度の規則性が窺えた。つまりⅠ類は検出面までは言及できないが、分布状況は調査区南西側にまとまりを持ち、Ⅱ類は調査区北側に中心を置くことが認められ、更にⅢ類は調査区中央付近に分布することが判明した。上記のことは単に形態的な相違もしくは時間差を示すものかは全く不明であるが、以上のような傾向が指摘された。しかし、これらは遺構の数、更に調査面積の制約上、他の遺跡にそのままストレートに当てはまるとは限らず、一応当該地区に限定されるものと理解しておきたい。尚、形態的な特徴をあえて言及するならば、Ⅱ類に属する井戸跡は比較的規模が他より大きい点が挙げられよう。埋土については、大部分が自然堆積である。特に埋土の下層に粘土もしくは、砂

が堆積している点に共通性が認められる。年代については、出土遺物がない井戸跡も存在するため、他の井戸跡より出土した遺物もしくは形態等から判断して中世に機能した井戸跡と考えたい。

土壙は6基発見している。検出面及び分布状況を見ると、調査区北側中央付近であり、黒褐色土層中ににぶい黄褐色土を斑状に含む点に共通性が見い出せる。これらの遺構の時期は出土遺物がない土壙もあるが、大きく中世の所産と考えている。

発見された遺構群を各遺構毎に簡単にふれてみた。それでは古代から中世という時代の中でこれらの遺構群の在り方から性格について考えてみたい。古代における当該地区の性格は竪穴住居跡、堀立柱建物跡群の存在から、わずかではあるが集落の様相を垣間見ることができる。しかし、発見できた遺構の数は少なく、集落の主体となるものは、遺構の分布状況からは特定できない。尚、溝跡については、屈曲するＳＤ04溝跡の在り方などから区画を呈するものと理解している。従来、新田遺跡を含め多賀城を取り巻く周辺遺跡は必然的に多賀城と密接な関係にある。しかし、8世紀代から9世紀初頭にかかる遺構は以外と少ない点が挙げられる。このことについては、律令体制の強化に伴なって、集落の性格も自然発生から計画集落に移り変わり、国府が整備されて行く過程の中で集落が増加して行くという1つの画期があり、その年代も9世紀を境とするものではないかという指摘がある（註6）。多賀城を取り巻く周辺で集落の様相が明らかにされた調査例は少なく、言及できる資料にも乏しい状況にあるが、資料の増加を待って再考したい。

次に中世に属する遺構群について考える。新田遺跡は、これまで今回の調査を含めて10回にわたり調査が実施された。当該地区周辺では、過去6回調査が実施され、その結果、中世の大規模な大溝を伴なう館跡の存在が知られるようになった。本年度も引き続き第7～10次調査が実施され、その内第7次調査では第6次調査で確認された大溝の西辺が確認され、第8次調査でも同様な溝跡の北東コーナーを検出した。このような調査結果より、当該地区は前述した館跡の様相について更に踏み込んだ成果が得られた。さて、本調査区は位置的に見ると大溝で区画された館跡の外側に当たり、この大溝を境として内側と外側では大きく遺構・遺物の様相が異なっている点が興味深い。つまり、遺構の分布密度、規模、出土遺物の質及び量などである。以上の点を個々に列挙すれば、大溝の内側は検出された建物跡の規模が大きく、重複関係も複雑な様相を呈している。出土遺物も質量共に豊富である。これに対し外側は建物跡の規模が小さく、ほとんど単独で存在し、遺物についても質量共に資料的には乏しいものがある。このような点から内側は大溝で区画されて一つの大きな郭を構成し、この大溝から派生する小溝によって小さな郭が構成されていると考えられる。その広がりは第8次調査では北側に延びて行くことが判明し、今回の調査では更に西側に延びて行くことが判明した。つまり今回検出された

中世の遺構群はこれらを構成する一端を担っているのである。

（註）

註１　「多賀城町誌」多賀城町誌編纂委員会　(1967)
註２　「多賀城跡・政庁跡・本文・図録編」　宮城県多賀城跡調査研究所　(1980)
註３　「東北古瓦図録」　石田茂作監修　原田良雄編　雄山閣出版株式会社　(1974)
註４　「群山遺跡Ⅱ」　仙台市教育委員会　(1982)
註５　「名生館遺跡Ⅰ」　宮城県多賀城跡調査研究所　(1981)
註６　「第15回　古代城柵官衙遺跡検討会資料」　(1989)

（引用　参考文献）

○「大和考古学資料目録２　一館蔵古銭資料一」　奈良県橿原公苑　考古博物館　(1973)
○「下夕野遺跡」　秋田市教育委員会　(1979)
○白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所　(1981)
○宇野隆夫　「井戸考」『史林　65－５』　(1982)
○「年報２　一昭和62年度一」　多賀城市埋蔵文化財調査センター　(1987)
○「蛭舘跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告23』　福島県教育委員会　(1987)
○橋口定志　「中世居館の再検討」　東京考古五号　(1987)
○須田茂・義江彰夫　「群馬県東田遺跡の中世村落遺構」　日本歴史第471号　吉川弘文館　(1987)
○「新田遺跡（第７次調査）現地説明会資料」　多賀城市埋蔵文化財調査センター　(1988)
○「新田遺跡（第８次調査）現地説明会資料」　多賀城市埋蔵文化財調査センター　(1988)

写　真　図　版

図版１　調査区全景(東より)　上　　図版２　調査区全景(西より)　下

図 版 3
SI01住居跡
SB06建物跡（南より）

図 版 4
SI01住居跡
SB06建物跡（北より）

図 版 5
調査区北東部
遺構検出状況（東より）

図 版 6
SB01建物跡（南より）

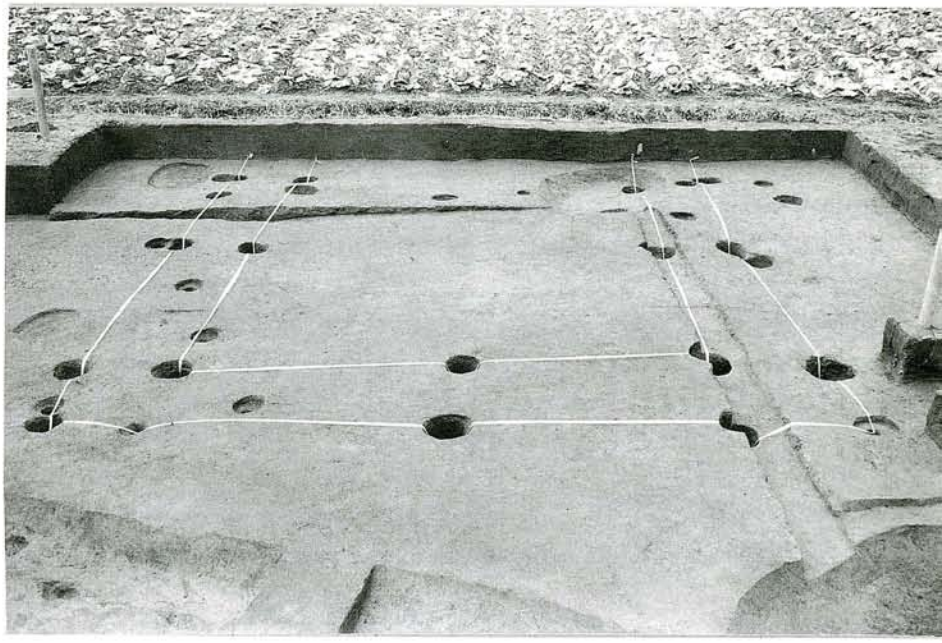


図 版 7
SB01建物跡（南より）

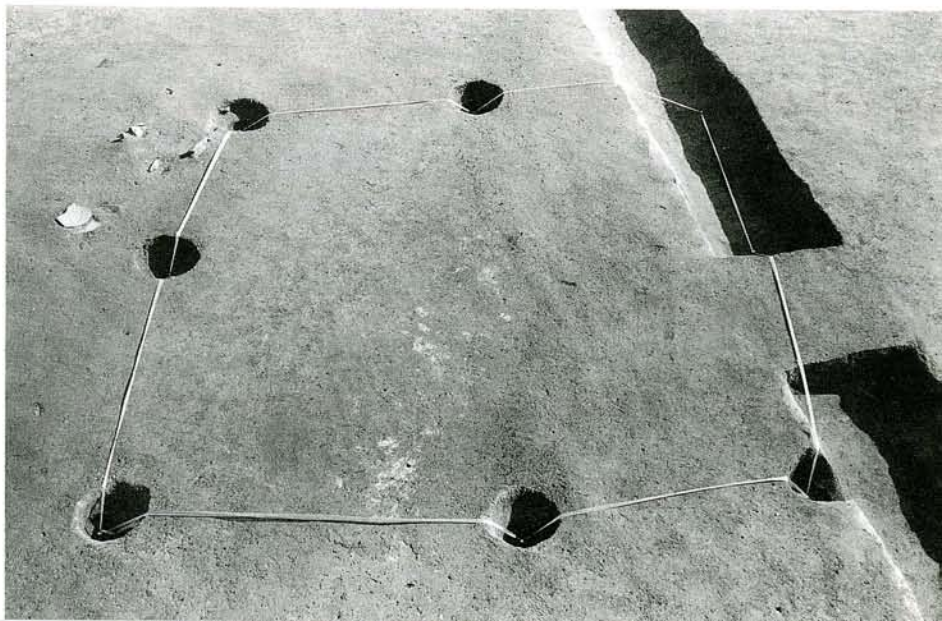


図 版 8
SB02建物跡（西より）

図 版 9
SB04·05建物跡
検出状況　（西より）

図 版 10
SD01溝跡セクション
（東より）

図 版 11
SD02溝跡セクション
（西より）

図 版 12
SD05溝跡　（東より）

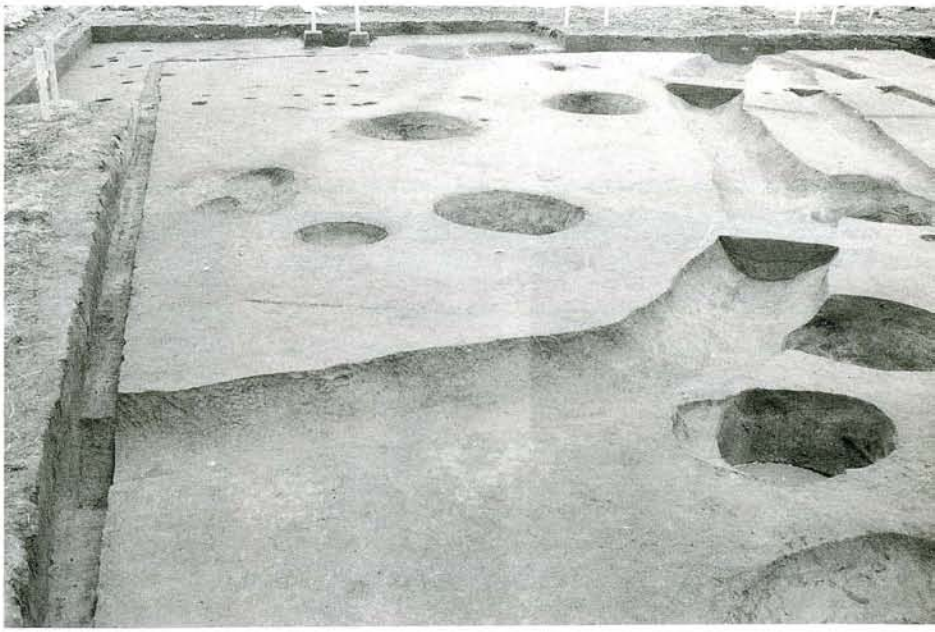


図 版 13
SD05溝跡　（西より）

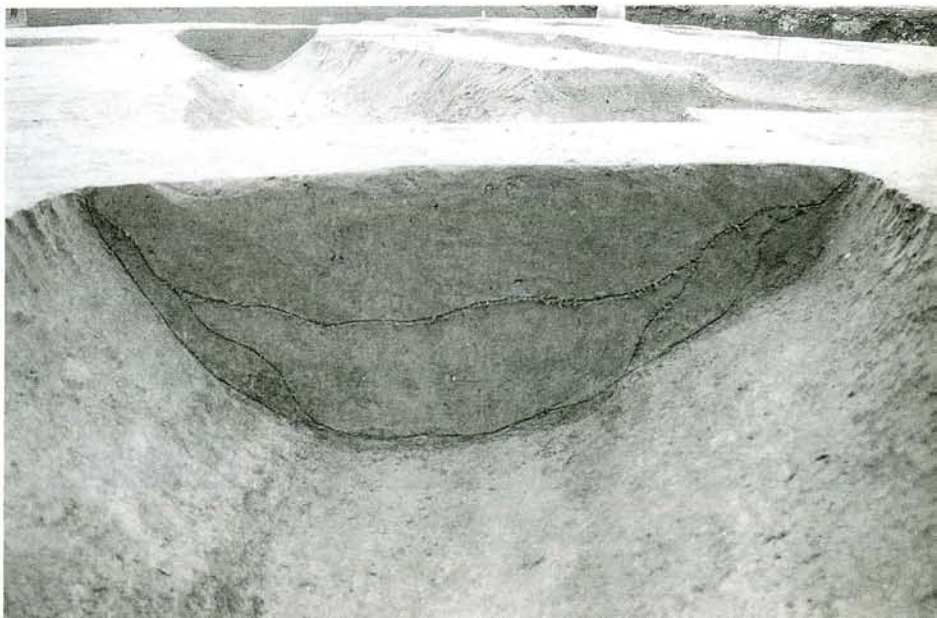
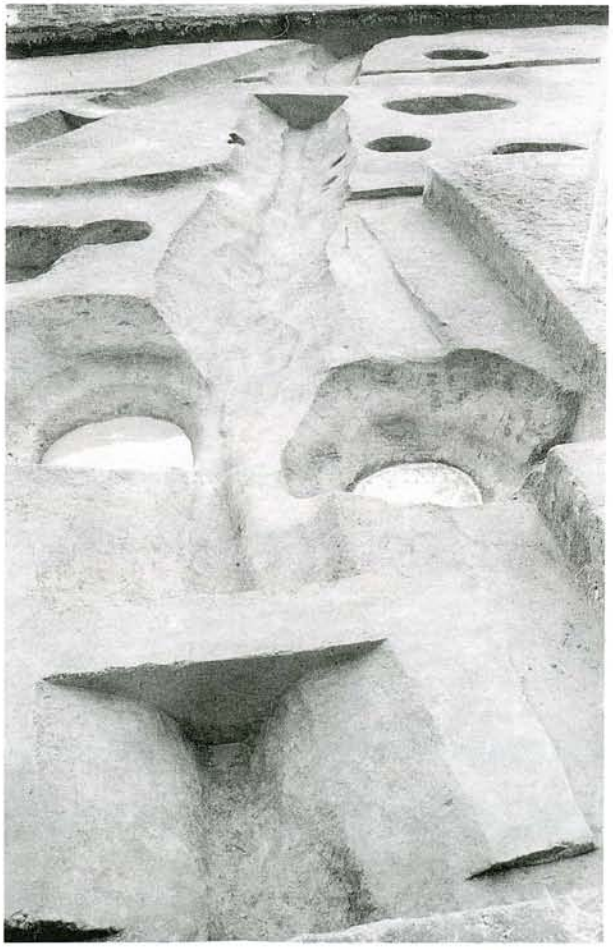
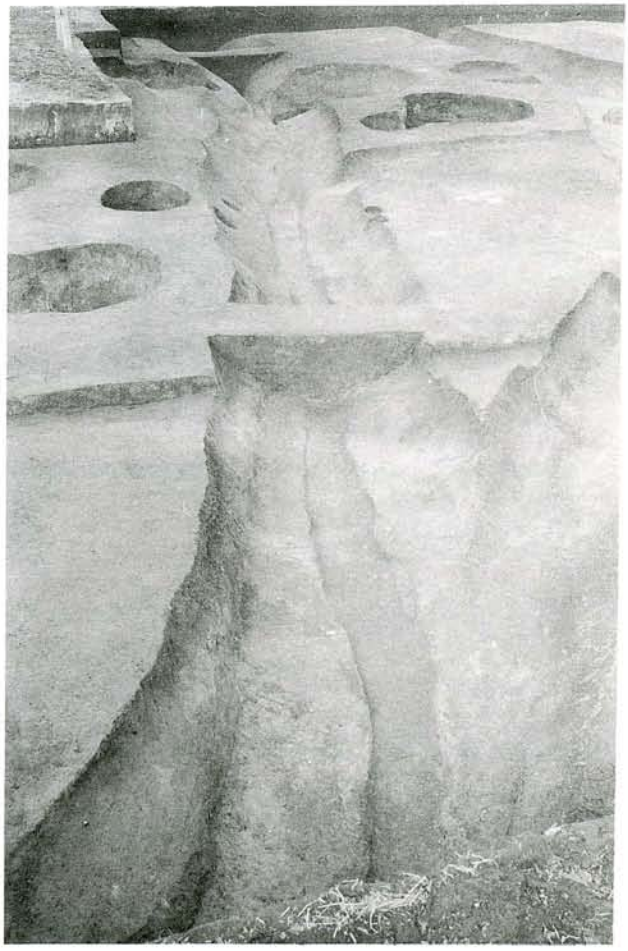


図 版 14
SD05溝跡セクション
（西より）

図版15　SD05溝跡 土師器杯出土状況



図版16　SD06溝跡(北より)



図版17　SD06溝跡(南より)

図版18　SD07溝跡(北より)

図 版 19
SD08溝跡（北西より）

図 版 20
各溝跡
検出状況　（東より）

図 版 21
SE02井戸跡

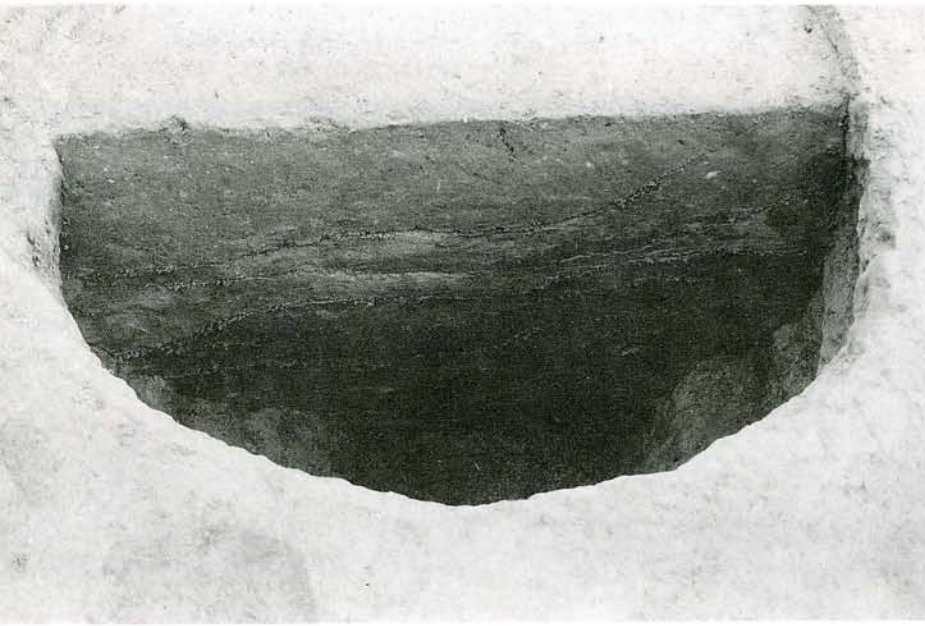


図 版 22
SE02井戸跡
（セクション）

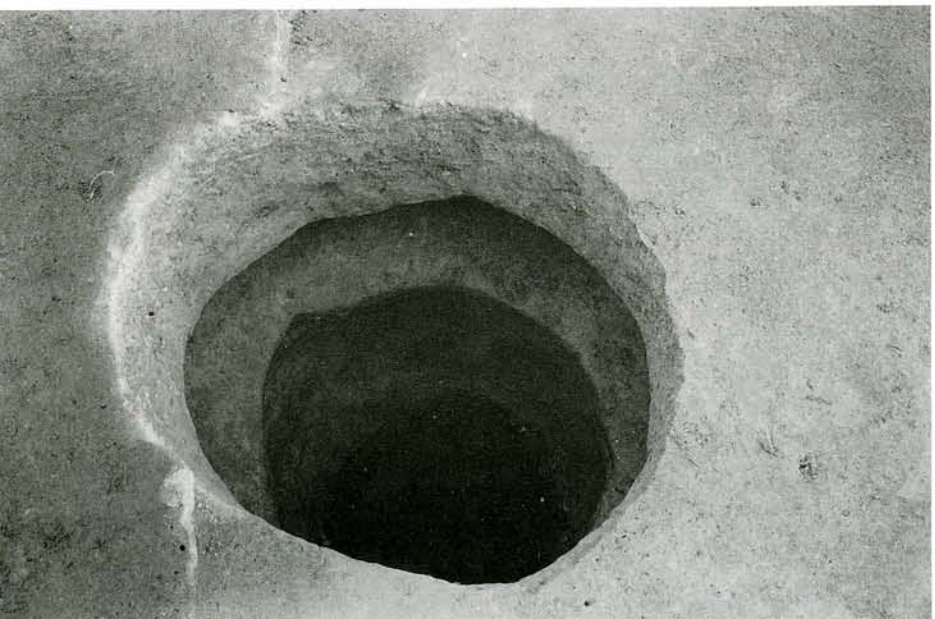


図 版 23
SE04井戸跡

図 版 24
SE04井戸跡
（セクション）

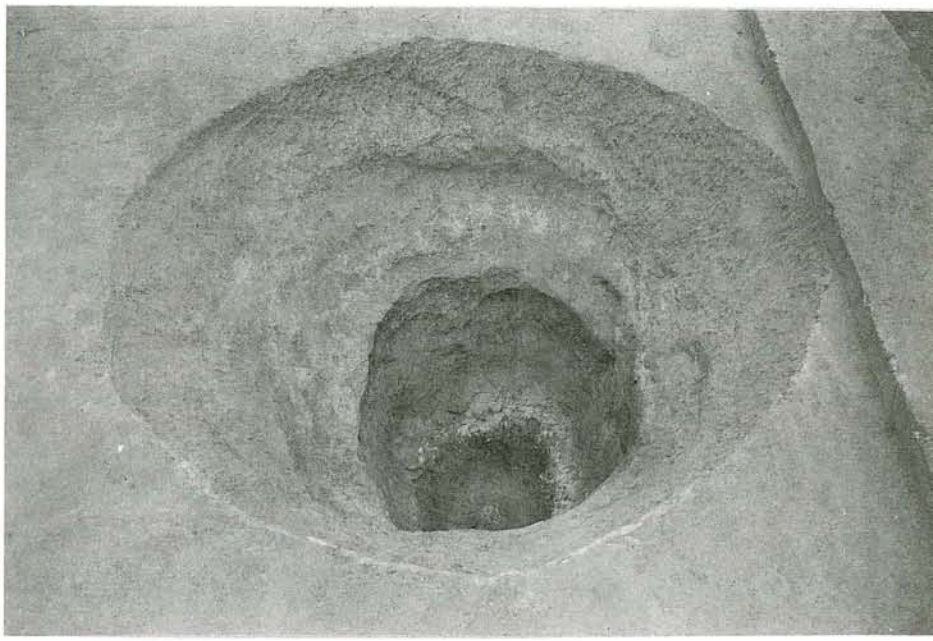


図 版 25
SE06井戸跡

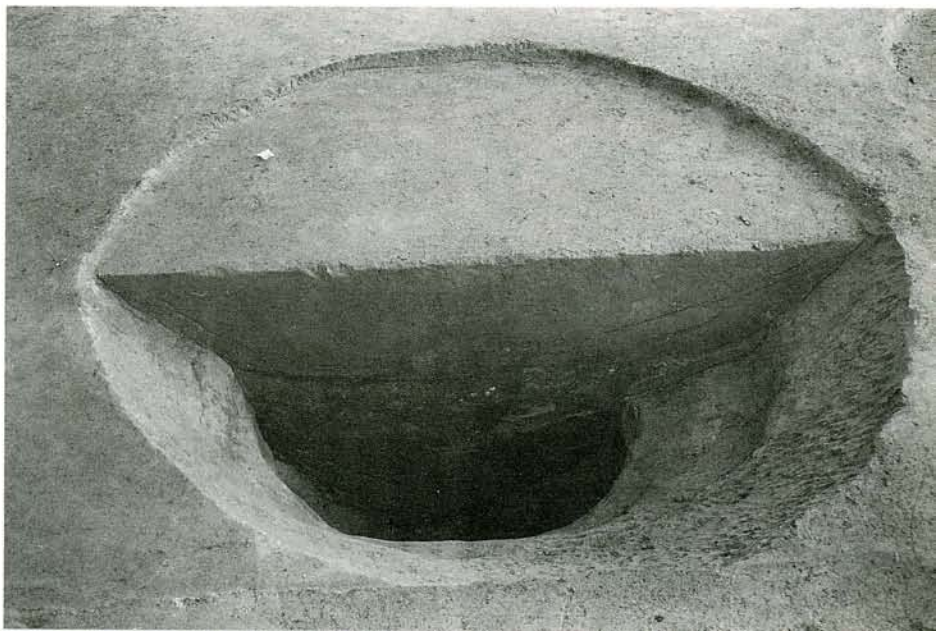


図 版 26
SE06井戸跡
（セクション）

図 版 27
SE07井戸跡

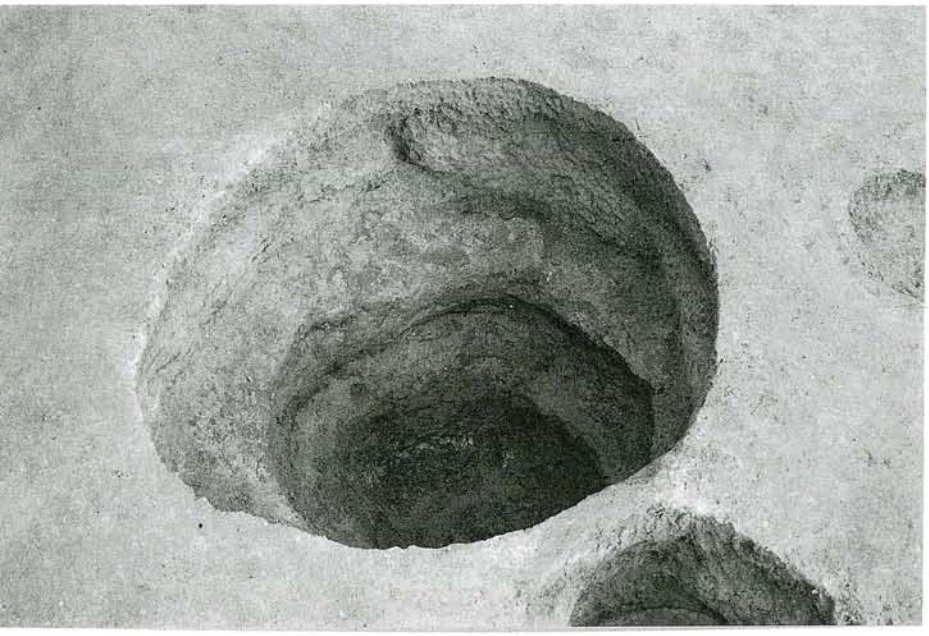


図 版 28
SE08井戸跡

図 版 29
SE08井戸跡
（セクション）

図 版 30
SE09井戸跡

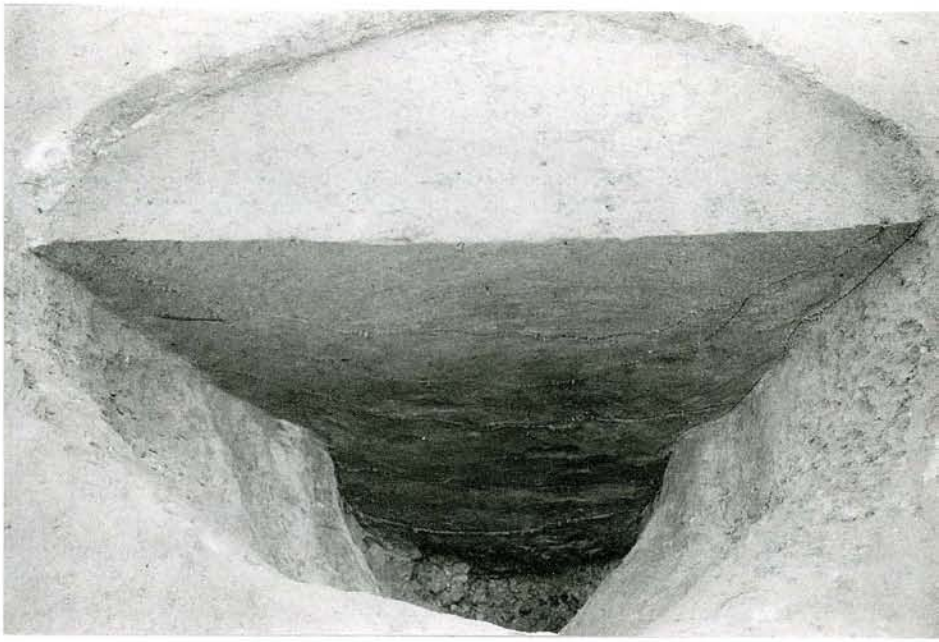


図 版 31
SE09井戸跡
（セクション）

図 版 32
SE11井戸跡

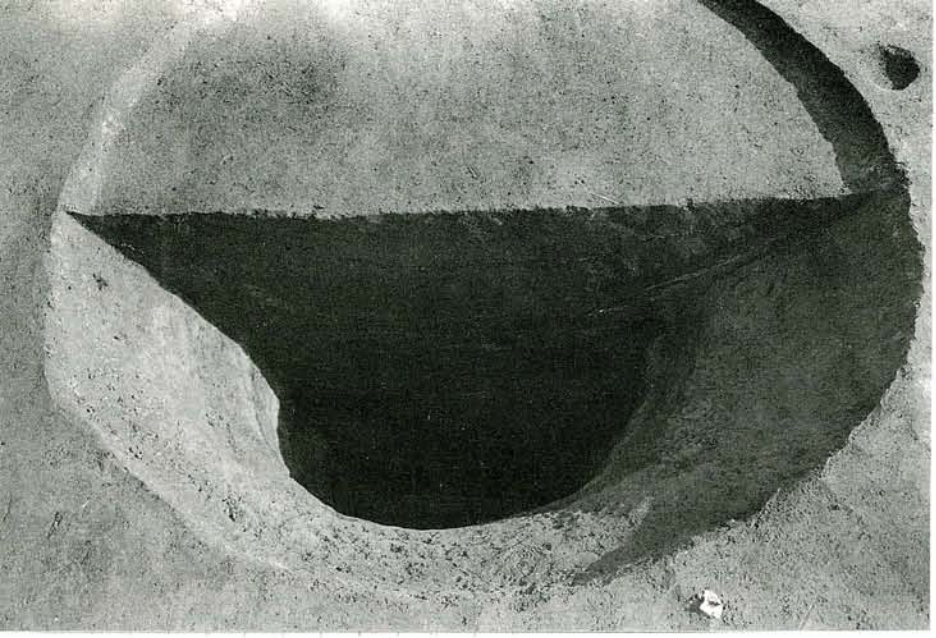


図 版 33
SE11井戸跡
（セクション）

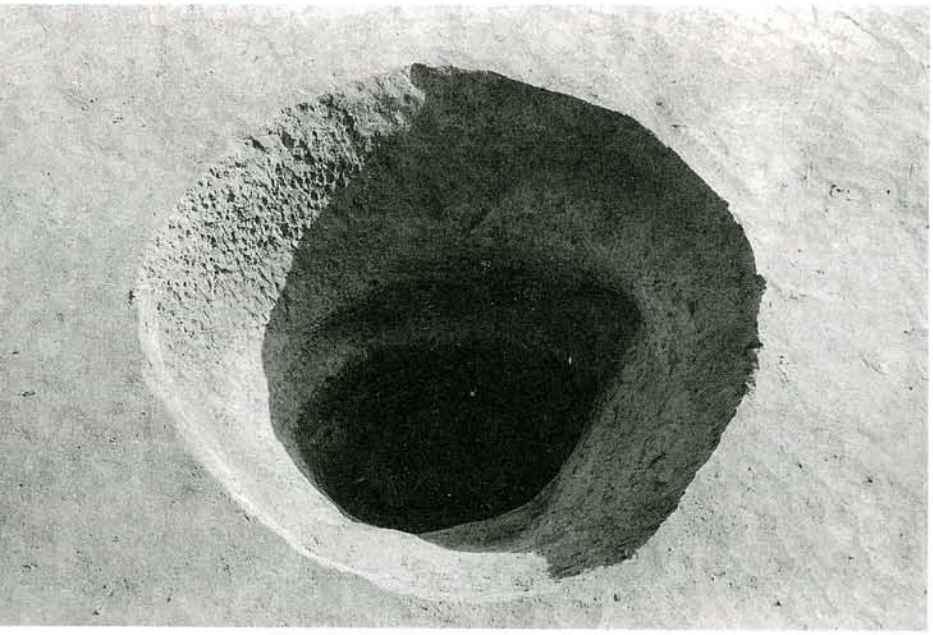


図 版 34
SE12井戸跡

図 版 35
SE12井戸跡
（セクション）

図 版 36
SE13井戸跡

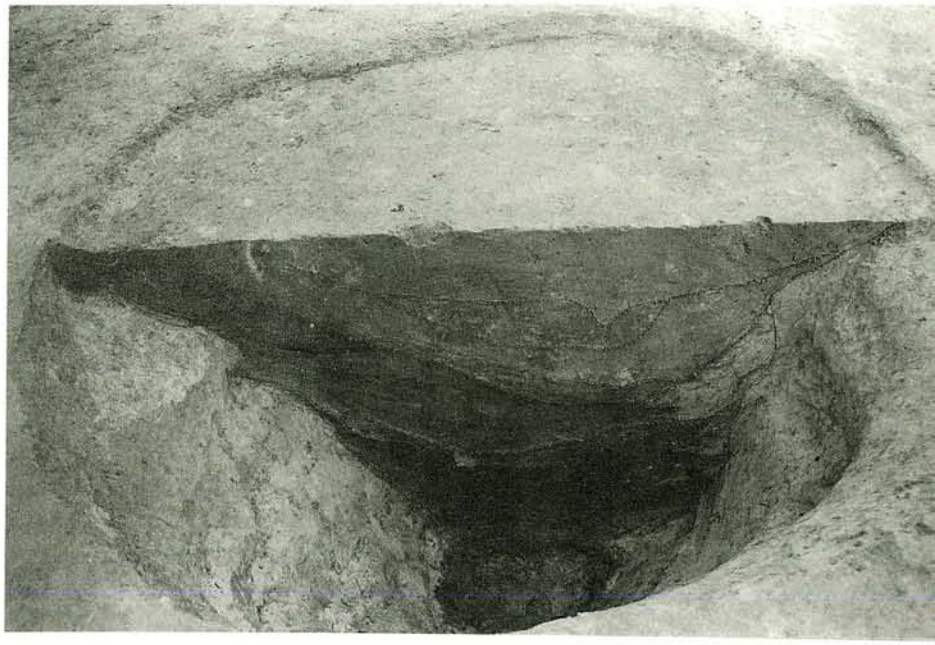


図 版 37
SE13井戸跡
（セクション）

図 版 38
SE13井戸跡
漆器椀出土状況

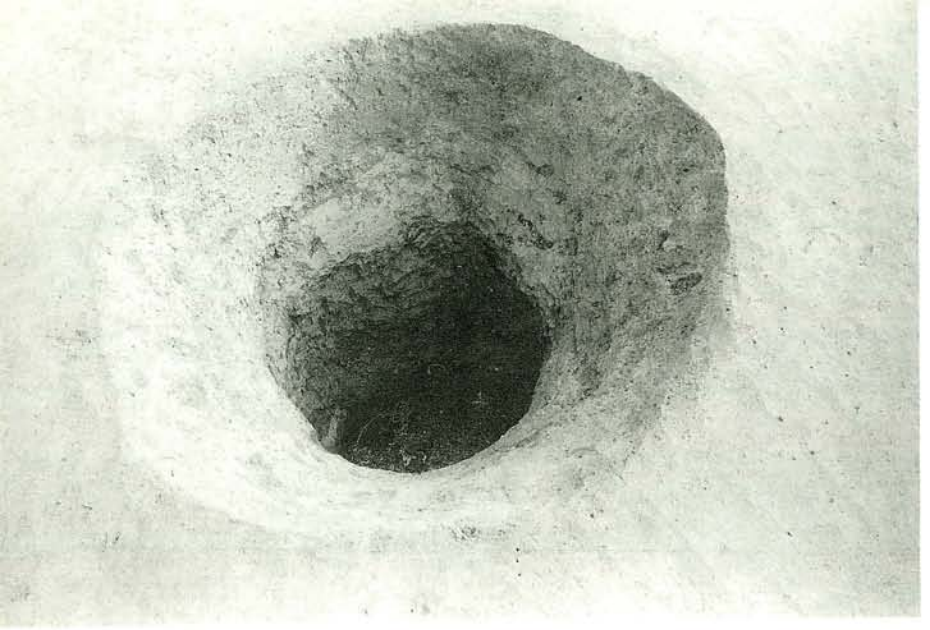


図 版 39
SE14井戸跡

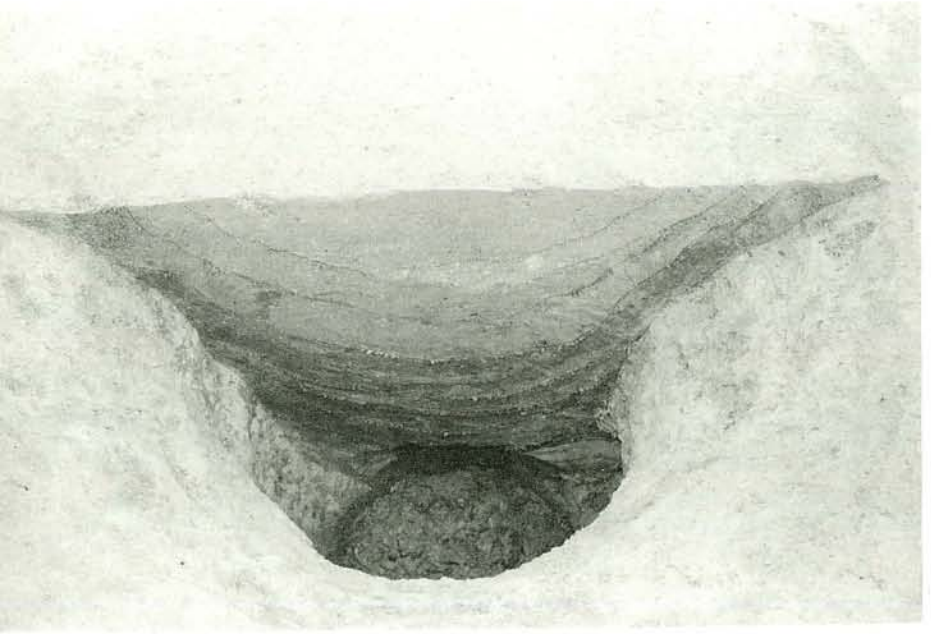


図 版 40
SE14井戸跡
（セクション）

図 版 41
SE15井戸跡

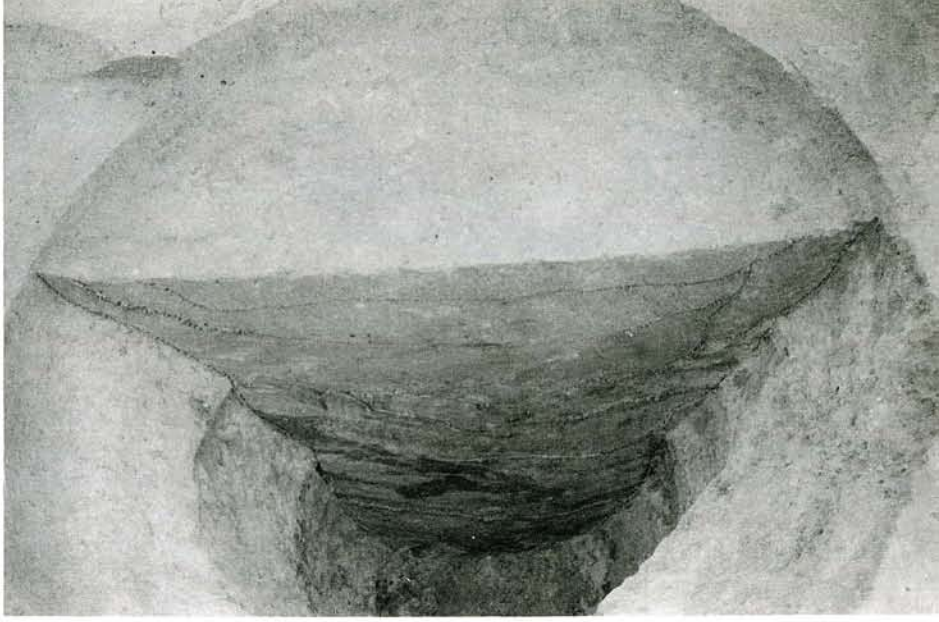


図 版 42
SE15井戸跡
（セクション）

図 版 43
SE16井戸跡

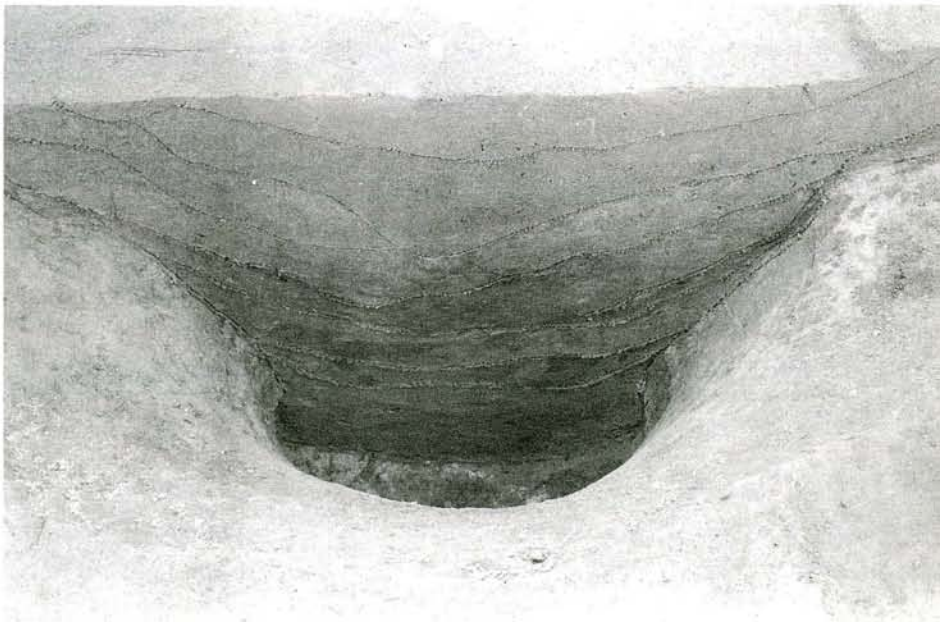
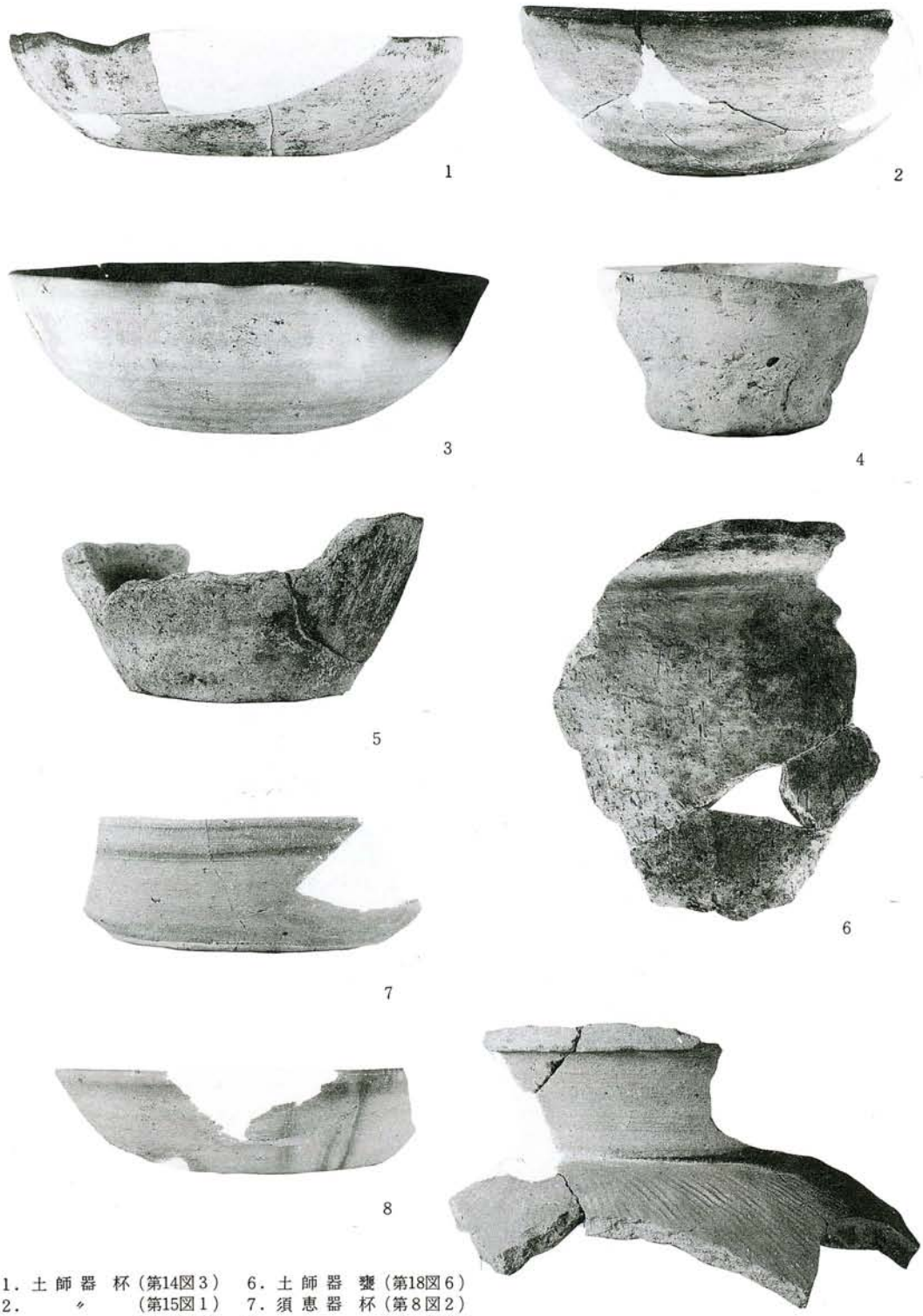
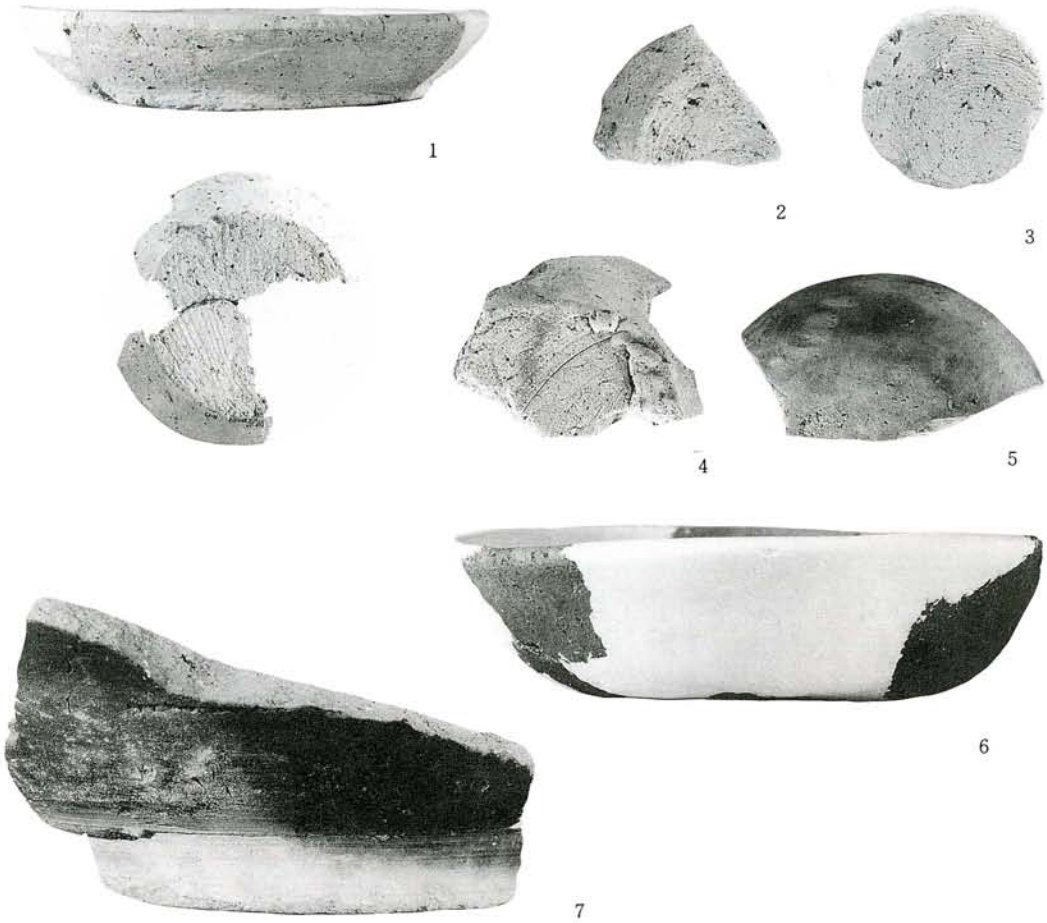


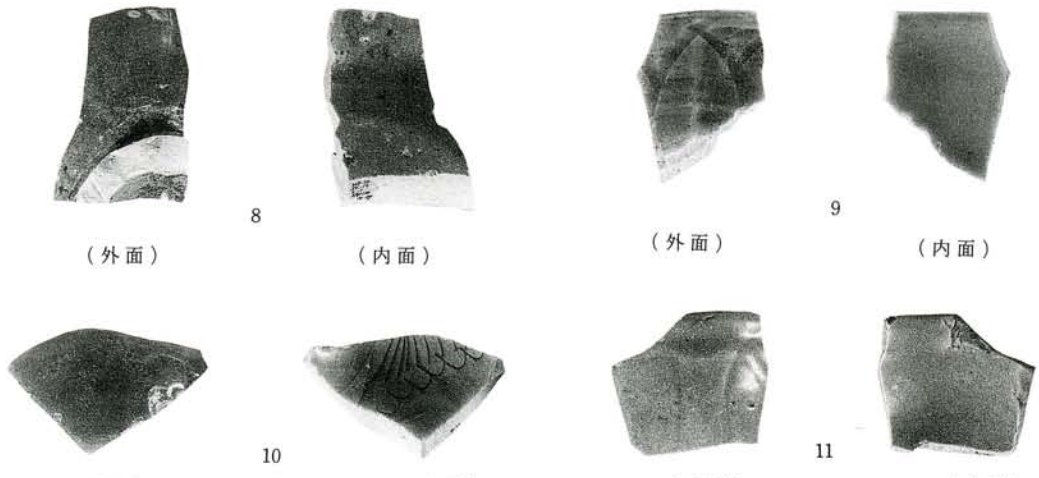
図 版 44
SE16井戸跡
（セクション）



1．土師器　杯（第14図3）
2．　〃　（第15図1）
3．　〃　（第15図3）
4．手づくね土器（第15図2）
5．土師器　甕（第8図1）
6．土師器　甕（第18図6）
7．須恵器　杯（第8図2）
8．　〃　〃（第15図4）
9．　〃　甕（第15図5）

図版45　出土遺物(1)





1．カワラケ　（第27図４）
2．　〃　（第14図１）
3．円盤状製品（第22図４）
4．カワラケ（第22図２）
5．　〃　（第22図３）
6．　〃　（第27図３）
7．無釉陶器擂鉢（第14図２）
8．青　磁　椀（第27図５）
9．　〃　〃（第27図８）
10．青磁椀（第27図６）
11．〃〃（第27図７）

図版46　出土遺物(2)

1

2

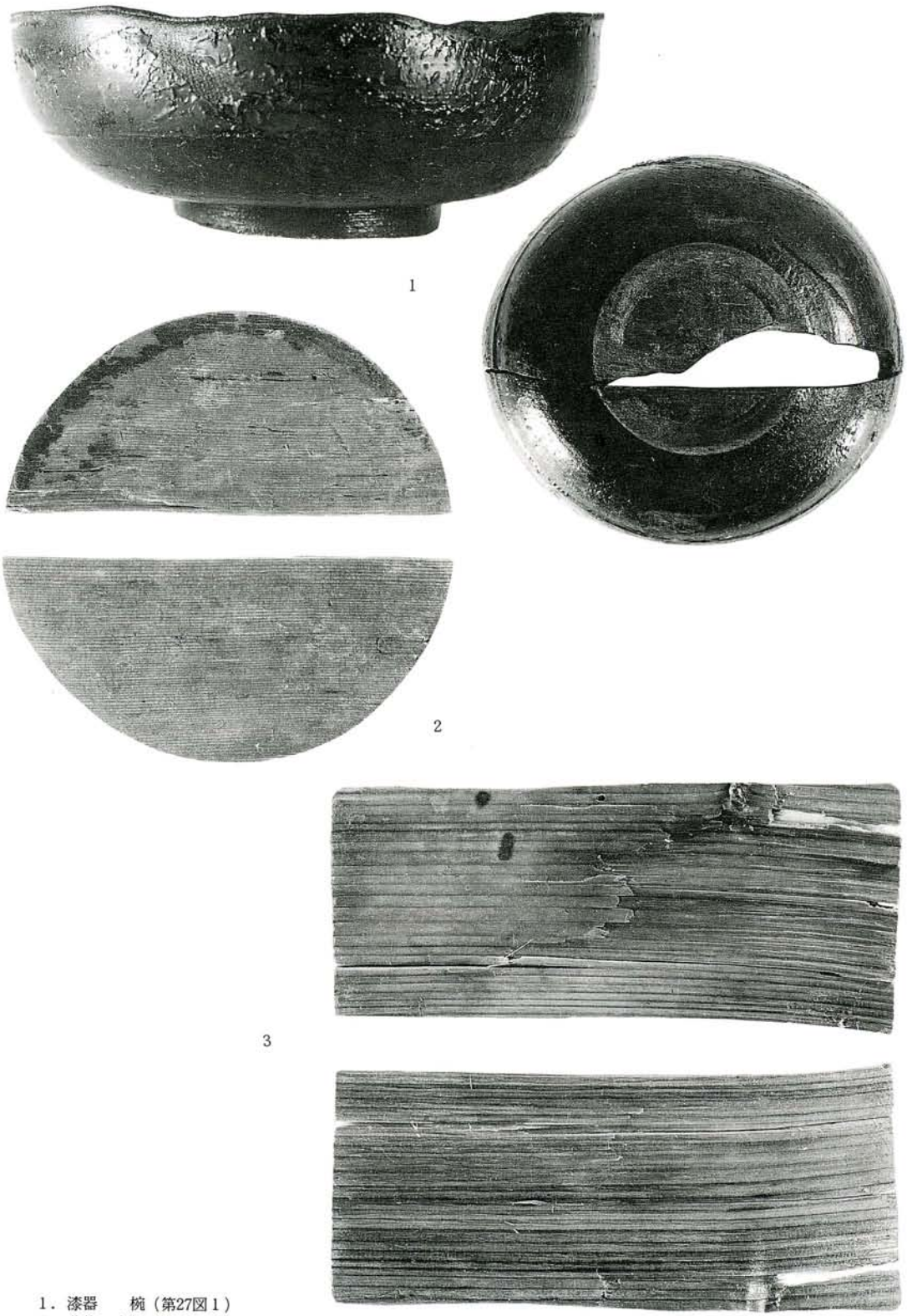
3

4

5

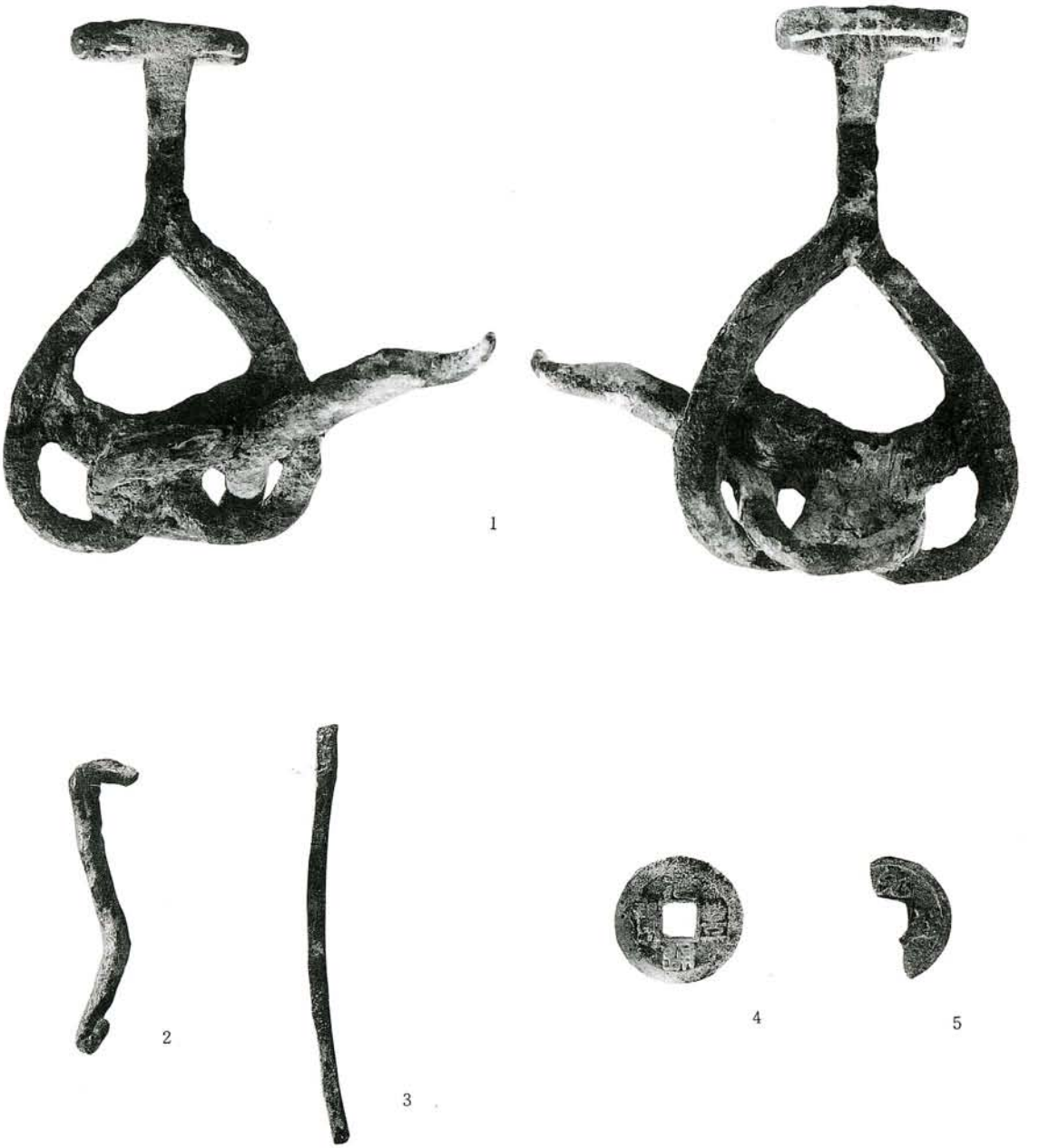
1．軒丸瓦（第27図９）
2．平　瓦（第16図２）
3．　〃　（第16図１）
4．砥　石（第16図３）
5．　〃　（第18図２）

図版47　出土遺物(3)



1．漆器　　椀（第27図１）
2．曲物　底板（第27図２）
3．板状木製品（第18図１）

図版48　出土遺物(4)



1．馬具(轡)（第29図１）
2．鉄　　釘（第14図４）
3．　〃　（第29図２）
4．古　　銭（第30図１）
5．　〃　（第30図２）

図版49　出土遺物（5）

多賀城市文化財調査報告書第１８集

新　田　遺　跡

昭和６３年度発掘調査報告書

平成元年３月３１日　発行

編　集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
発　行　多賀城市中央二丁目１番１号
　　ＴＥＬ　０２２(３６８)０１３１

印　刷　㈲　伊　藤　印　刷　所
　　多賀城市下馬５丁目１番７号
　　ＴＥＬ　０２２(３６２)０８０５